

毘首羯摩

泉鏡花作

箆の色絲

—

織機の温泉 — 野州鹽原のうち — 庭の
湯は、湯宿秋絃館の三階建の棟を離れた、緋葉が今
を盛の庭づたひに、清き溪川の磧を穿下げた處にあ
る。

一座敷、茶室らしい別棟に成つて居て、下へ階子
段を下りると石で圍つた大な室構に、巖を沸く湯を
満々と湛へて居る。

入ると、なぞへに次第低に、棧敷を構へた體に床
が出来て、薄縁を敷いて、其處へ入交ぜに浴衣を脱
せる。

棚も洗面場も何もない。

一面の石疊、人造石か何かの、ざく／＼した薄白
いので、炭竈の形に圍つて、硝子窓を切つた處は、
口を開けた雪達磨と言ふ體がある。

此の窓を溪河の水が横に流れて、浴するものゝ頭
の上を、青く畝りを打つて衝と走る。

が、流の急なのは岸へ寄つた方だけで、名にし負
ふ激流も、此のあたりは一定み淀んで、向うの断崖
は、緋に朱を交へ黄をあしらつて金泥の霧を刷く。
其の削立てた鑿の紫なす冴を其のまゝ深く水底に映
して、水は靜に、波は滑かに、すらりと大なる池の
如く、藍を湛へ、碧を澄まして居る。

やがて、川幅其のまゝの早瀬に成つて、突當りの
普門が淵へ灌ぐのである。

一方に、群青淺き淺葱の空を、山が噴く白い雲に
ぼかして、其處に芳野瀧と言ふのがすらりと掛る、
姿の枝垂櫻に似たゝめの名であらう。

此のあたりの湯の宿、四五軒が、銘々に飼つて置く数の鶯が、此の大池の面に悠暢として浮んで、瀧の裙あたり、絶壁の根のあたり、また一處堰を築いて、其處よりして凄じい瀬に成るあたりまで、すら／＼と泳ぐのが、近く、ふら／＼流れて寄ると、蒼首、銀の背、萌黄の翼と、色々に見分けは着くが、離れて遊ぶ處は、何れも一様に皆雪の如くに白い。水が濃く眞蒼な所爲であらう。でなければ、錦葉に彩を奪はれるためかも知れない。

見た處、あゝ、鶯か、などと言ふ、手軽なものは思はれぬ。眞白な影を揃へ、姿を並べて、縦横にもみぢの錦を其のまゝの水の綾を曳く風情は、正に水鳥の中の仙人である。

此仙人どの　　しかし、ともすると俗界に羈を投げて、ツイと来て、庭の湯を窓から一寸々覗いて行く。

中には、コツンと硝子窓を突くのがある。それ、今も覗いた。

「ぎやあ、ぎやあ。」

「ぎやあ／＼ぎやあ。」

「女をんなが二人ふたり。」

「見みえるか。」

「見みえない。」

一面めんの湯氣ゆげだ。

――

ぎやあ。」

「ぎやあ、湯氣ゆげだ。」

と雄をすが三羽は。

入交いりまじつて見みて、後戻あともとりに、すつと泳およいで、けろりとすると、

「があ、があ、があ。」

「ぎや／＼、ぎや／＼、ぎや／＼。」

と堰あせきに添そつて一團ひとかたまりに羽はねを休やすめた雌めすが、一齊いちどきに羽はねを揺ゆすつて笑わらつた。

此この堰あせきの下したに、中島なかしまの大巖おほいはを柱はしらにして、兩岸りやうがんから渡わたした、流ながれとすれ／＼な假橋かりはしが架かつて居ある。板いたは龐そま末つだが、仙境せんきやうとも謂いうべき溪谷けいこくの清流せいりうに對たいして、白しろき虹にじの橋はしと稱となへられよう、銀河ぎんがの瀨せに擬なぞらへた稗時ひえまきの

裡なかの
棧橋かけはしの
ながめがある。

橋 ー 霞のやうな此の繼橋は、秋絃館の縁下の碩から、すぐに渡つて、川向うなる、喜十六の絶壁の根を穿つて、堆い落葉の道を、林の枝の見えがくれに、蓬萊巖、毘沙門巖、はらからの瀧、草摺の橋、兒太郎淵などへ抜ける間道に成つて居て、ともすると、淺葱、紅、友染の袿端折した艶なる影を水の瀬にしがらむけれど、多く往來ふのは柴擔ぐ翁、草刈の女、鋤を擔いだお百姓である。

が、折から其の影も見えぬ。

二階三階の欄干に、肘ついた客もなく、縁の柱に凭れた姿もない。づらりと箱をさしたやうに閉された秋深い新しい障子に、やゝ西に行く太陽の影が、形なき風を白く、朱葉を誘つて、薄桃色に宿つて居る。

「ぎやあ／＼ぎやあ。」庭の湯の窓に又寄らうとした三羽の雄が、ツイとそれて、つら／＼と横流れに、半圓の波紋を曳いて、水の眞中へ行くと、早

や其處に翼を控へた十四五羽の雌に交つて、一齊に、
「きやあ／＼ぎやあ／＼。」

すぐに、けろりと靜まる。と、瀧の音と、瀬の響
の間が寂寞と成つて、一群の鷺の組並んだ形は、淵
に一輪、大きな車輪の如き白芙蓉の花の浮出でた趣
がある。

此の寂然たる時、浴槽の石室の蒙々とした湯煙の
裡に、透通るやうな聲が聞える。

「何だか可恐いやうだね。」
其の姿は見えないが、脱ぎすてた衣の色は、湯氣
の下に、霧深き緋葉を潜めた。

他に訛ある女の聲が、

「大丈夫でござりますだよ。底が迂り

ました處で、はあ、一體に浅いでござりますでな。」

「浅いけれども、これでは、大な石ころ磧のまゝ

なんだね。」

「然うではござりましねえ、これでもはあ、積立

拵へたもんだがね

湯さ一所ぢやあねえで、

處々から湧きますで、一面のたゞきにすると、沸き口を留めますだで、な。」

「でもね、石と石の間が、こんなにごろ／＼透いて居たんでは、何が出ようも知れないからさ。」

「あれ、何が出ますもんで。」

湯のほか

さ、水だつて出まさないだよ。」。

「餘り安心は出来ませんね　ー　蛇が居たら何うしよう　ー

「蛇ちて蛇でござりますかね、何が、蛇なんぞ。」

「蛇なんぞと、手輕に然うお言ひだがね、あゝ、

可厭だ。　口で言つたゞけでも悚然とす

る。」

「あれ、まあ、そねえに縮かまりなせえますと、有るだか、ねえだか分ん無え肩が、尚ほの事、細らこく成つて、つかまり處がござりましねえよ。」

話にはな、美しい白ツこい指の事を、白魚のやうだと言ふけれど、貴女様は、肩が、はい、其の白魚のやうだでな。」

「おや、氣味が悪いよ。」

「何でや。」

「餘り膏の掛けやうが強いからさ、何ぞ驕りませうね。」

「へへへ。」

「でもね、此處で鰻なんて言ひツこなしだよ、似たと思ふだけでもぞく／＼するから。」

あゝ、難有う。最う可ござんす、お草臥れだらうねえ。」

「何、貴女様、柔かうて、滑らつくくて、何處にも、はい、力の入れ處がござりましねえ。眞綿のやうだで、はい、私等がやうな手では、引ついて搦まるで、眞綿の方が、どねえに扱ひにくいだか知れねえだ。肩を敲きますぐれえ、何でも、はあ、ござりましない。まあ、眞白で、指で白粉を解くやうだね。」

「澤山 働いてくれたり、賞めてくれたり、濟まないね。さあ、最うあがりませうね。眞個に、もう可いんだよ。」

ざぶりと湯を浴びせた音が玉に灌ぐが如く響いた。

三

おなじ其の湯氣の中で、

「最^もう一度^ど浸^{つか}らつしやりまし、貴^{あな}女^な様^{さま}、なんぼ暖^{あつた}まるちても、ちよつくら浴^あびさしたばかりでは湯^ゆざ

「めがすると成りましねえ。」

「なああや、もし貴女様。」

「今ね、」

「何だづら。」

「一寸氣に成つたんだけれどもね、此の湯槽の天井は、矢張り、石かい、石垣なの？ 先刻は、那處の内湯の方に、お湯がなかつたもんだから、無いと
なると尚ほ入りたし、其には女中さんと言ふ氣丈夫
なのが一所に此處へ来ておくれたつたものだから、
些とも氣にしないで入つたんだがね、石なんぢやあ
ないのかい？ 天井はさ。」

「え、板が張つてござえますだよ。上が一間、
座敷に成つて居りますでな。」

「電燈があるのね、眞中に――石垣だと、何
處から鎌首を出さうも知れないし」

「あれ又、貴女様が、嫌だと言はつせるあとから、
御自分で、はい、引摺り出すやうな事をおつしやる

だもの。」

「堪忍して頂戴、引摺出して堪るもんですか。」
「構ひましねえ、引摺、出さつせえました處で、
こんな熱い湯の中には入られましねえよ。」

「否、然うではないんだとさ。何だか
書もつで見たんだがね、人が手を入れるとビリツと
するほどな湯の裡に、赤い魚がすら／＼泳いで居る
處がある」とさ。」

「はあ、それかつて、貴女様、秋の彼岸まであ
よ。後は穴へ潜るちだが、もう、はい、後のお月見
も過ぎたゞもの。」

「然うね、眞個自分の氣で引出すやう
なものだわね。上は板張だと言ふし、それでは安心
をして入りませうかね。」

「好い、鹽梅だ。貴女様のお庇でお供をして、晝
間、のう／＼と浴びますだよ。とつぷりと入らつし

やいまし。

なあや。」

「お待ち

上は板と、真中に其の電燈は

あるし

待つて下さいよ。

それ

だと、私のある二階の座敷の天井と同一だわね。困

つたねえ。――私は先刻、だらしはないけど、御

飯過ぎにね、ついね、ほんの一寸だけけど、椅子に

凭掛つて居てとろ／＼したんだよ。尤も、

あの端近だから、椅子は座敷の片隅へ。縁側から拜

借をしたんだがね。肱をついて、とろり

としました。――その夢にね。――

可厭だ。

姉さん、何だつて、那處の内湯の方を干したの

さ。

「

「行届きましねえでな、今朝から氣が着かずに居

りましたゞがね、元湯を引張つて来る、それな、巖

ぼこの鐵管の口へ、木の葉がいかいこと山から吹溜

つて、出口を埋めたもんだでね、湯が通らなくなり

ましたで。」

「まあ、嬉しい、元湯へ、もみぢが溜つたの。」
「何だか知んねえ、枯葉だだよ。」 番頭

どんは忙しいな、内の作男が鍬さ持つて、それさ搔きに行きましたでな

「風雅だね。」

「いまに見さつしやりまし、彼處なての山の根に、すう／＼と、葉々を焚く青い煙が昇りますと、たつぷ／＼

と、だぶりと湯が鳴る。

「樋の口から出ますだよ。湯の出る暗號だ、おや、ほ／＼、拍子に乗つたで、狼煙のやうづら。」

昔は、はい、此の邊さなへ、平家の落人が來さしつけえ、軍の話のやうだなえ。」

「 軍

落人

女中さ

ん。

と此の時、あどけないまで優しい聲して、

「私も話に乗るやうだけれどもね、先刻、私の其の夢はね、不思議なんだよ。私がね、矢を番へて弓

を射るんです。――楊弓だか、半弓だか、ヴァイ
オリンほどの弓に、光るやうな白羽の箭でね。――
的にするのが座敷の天井に掛った電燈なの。それ
を的に、さしかへ引替へと言つたやうに、頻に射る
んだがね、心持が、何だか空に、誰も、何も形のな
い、神様が、誰方が、然うね、毘沙門様と云つたや
うな大將が在らして、其の方の、いひついで、私
は弓を射ることを頻に習つて
教はつて居
る處なの。

凭掛つた椅子が、何時の間にか、眞蒼に刻々の入
つた、矢張り椅子の形の巖に成つて。――私は巖
の角に、痛いほど背をつけて、ひつたりと體をきめ
て、恚うね、胸も乳も反すほどに、身體を半分捻向
けて

いま其の姿も思はるゝ。

「臑まで長く張つて、少し仰向けに成つて的に狙
ふんです。――あの、電燈は高いのね。ですから、
そんな姿勢をしたんだらうね。」

そのうちに、電燈の白い笠が、いつのまにか、一
束の尾花！ あの白くほゞけた薄の穂に成つてさ、
矢が当たると、それが今も又氣になるんだけれど――
矢が当たると、穂の中から、ばら／＼と木の葉がこ
ぼれる。
褐色ののだの、黄色いのだの、枯
れたのだの、あの、紅のやうなのが一枚も交らな
つたのは、あとで氣が着くと、電燈に灯が点れて居
なかつた所爲だらうね。――目が覺めると、胸
を捻つて、椅子に裙を投げて居た、其の姿勢のまゝ
なんだもの。

半分疊へ、身體半分、胸を仰向けに横に椅子に寝
て、
左手とか右手とか、言ふのね
弓を張る、矢を引く兩手を、其なりに、うと／
＼して居たんだもの、
肩が張つて、肩が
張つて。裸體でさ
それでも我慢が出来な
いで、女中さんに御苦勞を掛けたつけが。

あの、まだね、そればかりぢやあないんだよ。――

夢の裡で、其の幾條となしに、射る、射るあとか
ら、巖の根に控へて居て、さしかへの矢を、矢をと、

取つて渡しておくれなのは、いま、判然と尚ほよく
分る。其が女中さん、お前さん

んなんぢやありませんか。

何だか、女中さんは、小手を掛けて、草摺を着けて
でも居たやうだつたよ。」

「勇ましいだ、はあ、大すきだでよ。陣笠をかぶり
ましねえだか、御家來の雑兵だ。」

「後生、濟まないけれど、夢だから。」

「何、結構だ、陣笠だよ。それで、はい、貴女様
は妙雲尼、尼様だ。門前さ妙雲寺の御開祖でや。知
つてござらつしやりましよ。平家の、はい、重盛
卿ちの、お妹御のお姫様でな、はじめは、はい、此
の北の奥山さな、紅い袴の落人でござらしたお姫
様だよ。」

「まあ、緋の袴も、飛んでもない、お
姫様も勿體ないけれど、かはい相に、髪は薄くても、
尼様は酷いのね。」

「えれ／＼　やあ、何を言はつしやるや
ら、貴女様、洗髪を櫛巻にして居なさりますだでも、
鬢油を光らかした大い圓髻のお方より、艶々と、房
さりしてござらつしやりますになあえ。」

珊瑚

「姉さんこそ、眞個にいゝ髪だよ、羨しいほど澤山あつて。」

と其の清しい聲が言ふと、もう一人は揺る體で湯煙を煽つて、

「えへゝ、言はしやりますよ、何うだ、まあ、赤つ毛で、ばさ／＼して、馬の尻尾其のまゝだあね。」

「あれ又、尻尾なんて言つては可厭だよ

氣に成るもの。」
と一寸途絶える。

「何で、そねえに可恐えだかね、神様か誰方だかに教はつて、弓を射さつしやる、強いお姫様ではねえだかな。」

「まあ、お姫様も行過ぎた、飛んだ楊弓場の矢取だけれど、夢に然うやつて矢を射るうちは、鎧でも着たやうに、身體も心も引緊つて、自分でも何だかね、極りの悪いほど凜々しかつたがね。射て／＼射て、矢継早とか言ふんでせう
我手で放す
矢の数が、電燈の球の周圍を、雪か、もみぢが散る

やうに飛ぶうち、ずるりと其の球が伸びるとね、
天井の下へ、宙にずる／＼と下ると思ふと、電燈の
線に、一面に蒼白い鱗が生えて　――　あゝ、可
厭だ。

湯の中から、ざぶりと一杯、うだり加減の眞赤な
女中が、其の夢を話す婦人の雪なす膚へ、肩から浴
びせ掛ける音がした。

「ほれ、寒氣がなせますだ。一浴浸らつしやり
ましねえか、かぜを引いては成りましない。」

「では入らうかね、天井から、下つて来やあしな
いか知ら。　　いまの話はね、すぐにのろ／

＼と鎌首を上へ擡げたんだよ、電燈の球が大蛇の
頭に成つてさ。　　神様の御手傳で蛇を退治

るんだか、見込まれては成らないから用心をするや
うにツてお知らせなんだか、氣に成るよ。」

「何ねえしたとて、はい、陣笠被つた雑兵がつい
て居りますだちば　――　蛇の長いのや、太いのな
んざ、私等ひよいと摘んで、ぼういだよ。安心の上

にも安心のさつしやりませ。」

「嘘でも然う聞くと氣丈夫だね。」

「何、貴女様、嘘なもので。」

「もつと此方へ寄つておくれ。」

「あれ、女でも私あ小恥かしい。」

「何故さ。」

「餘りお身體さお綺麗だで、はい、此が野郎ばちなら、ぢきに溶けて、麩のりに成んべいと思ふだてばよう。」

「いやあ、富士の人穴だ、人穴だ。」

と突抜けの高調子、石室の石の壇を、天頂からどーんどしり。

「妖怪臭いぞ、人臭いぞ、わい、女臭いぞ。」

と、扉を大袈裟にドンと開けると、むら／＼と白い煙が戸へ抜ける、と齊く、湯の滴々を鏤めながらすら／＼と拭はれて、尖つた洲の形に顯れた硝子窓は、透明なる水の厚さに似て、揺れつゝ颯と藍を走らす。

「恰も一風、軽い風が添つたらしい、紅に黄を散らし、朱を亂した木の葉は、蒼穹のじやうごを溢るゝ如く、ぱつと輪に成つて、水面へ、くる／＼と螺旋に舞ひかゝると思へば、一煽り、煽つて落ちて、水に一幅の錦を敷く。ト、就中、燃ゆるが如き眞紅なのが、一枚、瀬に發機んで、ちら／＼と空へ戻つて舞つた。――姿は見えぬが、水底を深く領する妖しき美女が、晴れた中空を天降つた錦の直垂に、翩然と飛隄つて、ぬれ／＼と紅の唇して、接吻して迎へた趣がある。」

「綺麗だな。」

と入る途端に、其の風情を見て男は言つた

言つたのに仔細はないが、其の口の下で、呻くやうに、

「何て白いや。」

と何を見たか、うつかりらしく吐出して、一寸、てれた状して、硝子窓にびつたりと鼻を押附けた。

色の黒い、目の鋭い、痩せた小男である。

「眞白な鳥だいなあ。」

と呷つばきざまに、帯おびを解といた。

二

目めざされた驚あじるは、眞ま向むかの黄くわ巖わん朱しゆ壁へきの根ねに、づらりと一れつ列れつに並ならんで、一せい齊せいに翼はねを休やすめたが、風かせに、ふはノ、と毛けが揺ゆれる中なかに一は羽は、一寸ちよつと鬢びんの毛けを搔かくやうに足あしを動うごかしたのがある、水みづ搔かきで嘴くちばしを撫なでもしない

であらうけれど、然も婦らしい様子が見えた。

「ほう、吹込むわい、寒い。」

と言ふ時、棒縞の貸廣袖を、素裸に成ると、扉をドンと又内へ引いたので、一度すつきりと底が透いて、譬へば龍宮の浴室の顯れた如く、石疊も瑠璃に成るまで、あの眞紅な葉の一枚が脣に擬うた、其のぬしの姿の、ちらりと見えるやうだつたのが、こゝで再び濠々と立籠める湯煙の裡に幻に消えたのである。

「御免。」

と、それでも、婦ばかりと知つたか、殊勝らしく聲を掛けた。

「旦那様かあね、さあ、入らつしやいませ。」

「何だ、本館の肥満女か、然らば遠慮には及ばんわ。」

「あれ、それでも、はい、他に御婦人様お一方なえ。」

「可いんですよ。」

と優しく言つた。

「然らば、其方へ失禮して、此方の隅へ、どんぶ

り。

「と言ひも果てず、

「熱々々々。熱い、あツ。」

とばかりに飛上つた。

「ほゞ、旦那様、お弱いだ。」

「何が、何のと、不意打を食つたから

だい、お剩にない。身體が金で冷えてるわい。」

と聞えよがし、敢て洒落らしくもなく饒舌つたの

である。

人間は此で知れた。宿帳に――住宅は東京某

處 實業家で、來栖權吉郎である。が、自

から稱して來權々々と言ふから、番頭はじめ女中た

ち、齊しく來權と申奉る。――湯治は保養でな

い、女の香を洗ひに來た、骨まで沁みた紅白粉の灰

汁抜だ、と呼ばつて、女氣は一人もなし、手代ら

しいのが二人ついて、御存じの西那須野から自動車

で、ぶう／＼　昔、法螺の貝が抜けた如く、
山の土手腹を貫いて来た。が、織機の坂をまじぐら
に、此の旅館の屋根が見えると、峰を一座さしあげ
るやうに、両手を高く突張つて、胸を反して喚いた
――　秋絃館　出迎、出迎へと、

一晚泊つて、翌日の午、大廣間で酒の最中、電報
が一通届いたと思ふと、疾きこと風の如し、兩人行
けツ、と脇息を引搦んで、胴中で跳上つた　――
足が短いから然う見えるのである。
それから一人で居る。

時々、場所を選ばず、唐突に突拍子な奇聲を放つ
て、うゝ／＼、うゝ／＼と叫ぶ癖がある。女中たち
は、些と氣が變だと囁くが、お世辭ものゝ若い番頭
が、廊下で此の聲を聞くと、わツと言つて、放と尻
餅をついた。

「お旦那、何だすね。」
と、産は名古屋の渡りもので、輕口をにらせると、

「百姓。」

と兩の肩を怒らして、

「自動車ポンプが駆出すのでない、金子が唸るん

ぢやい。」

うゝ／＼、うゝ／＼、と則ち唸つた。

「はッ、那須野ヶ原まで突抜けたんね。」

で、恭しく手をついた。

忽ち御意に叶つて、見物には、與八と言ふ、其の番頭がお供である。

既に此の日の午過ぎにも、門前から、源三穴、逆さ杉などを一見しようとして、與八を従へて出向いたが、裏道を村つゞきに行きかゝる。途中で

こんな事があつた。

彼處に庚申塚がある。塚の古榎に注連を張り、御幣を立て、碑に庚申塔と刻んであるが、其の榎の枝には、蓮華の花瓣のやうな雲の上に、上弦の月を描いたのと、同じ雲の下に、北斗の七星を描いた兩面

額の、雨露に曝されたまゝ、枯葉とゝもに、さら／＼と鳴りつゝ掛つて居るのがあつた。此を視て來權が、變な青い色をした釜底帽を仰向けにして突立つたから、稻荷様の鳥居ではないが、何か悪戯をしはせまいか、怪しい古塚にもゝ靈でもあるとする、崇はお供の方へも見舞ふであらうと、信心氣の少い與八も、しり込をして、後の方へ引退つて立つと、それ、腰を捻り、肩を張つて、うゝ／＼うゝ／＼と例の奇聲を放つ。

「お旦那、那須野十里へ突抜けまんな。」

「何うだ、釣鐘でも寄進するかい。」

「と言つて 歩行出した。」

「先づ仔細ない。處が、村家一二軒、寂しい片側の崖を上へ出て、須卷の一峰を仰ぎ、脚下に急流を蹈んで、溪川を渡す橋を、細く目の下に臨んだ時であつた。」

「お旦那、須卷へは、もし、あの橋を渡つて参りますで、へい、もし、須卷へな。」

「須卷とは何だ。」

「當所温泉の一つで、萬人風呂と申しましてな、一時に萬人も入れますのでな。」

「何だ
萬人風呂、あゝん、來權の一人

湯の事かい。」

と金口の煙草を空に吹く。

「へい／＼。」

と言つたが番頭は解し兼ね、

「一人湯ではありまへんね、もし、萬人風呂で

な。」

「馬鹿！」

と面を一枚煽るやうに、キリ／＼と睨んで、

「神経を働かせろい。天下の奴等、有象無象の萬人風呂なら、來權の一人湯だと言ふ事ぢやい。」

「へい／＼へい、えゝ、成程御意であして。」

と莞爾にこりともしないで、叩頭おじぎして言いふのを、けろりと忘わすれたやうに、目めにも留とめず、

「やあ、奇きだわ。」

と金の環きんぐわんの太ふといのが嵌はまつた、洋杖ステツキを大廻おほまはしに振ふつて、崖下がけしたをずかりと指さして、

「彼あれは何なんだぢやい。」

番頭ばんとう乗出のりだし、腰こしを屈かめ、小こ手を下したさまに翳かした處ところは、裏關所うらせきしよをも見みの體ていで、

「へい、えゝ、あれは、もし、へゝゝ。」

「猿さるにしては毛けがなくて滑すべつこい。」

「へゝ、お旦那だんなの御眼力ごがんりき

と妙めうな事ことを言いふ

「こゝで御覽ごひびうじますれば、猿さるとも兎うさぎとも見みえませう、けれども、ですな。へゝ、彼あれでも貴方様あなたさま、村むらの娘むすめであしてな。」

「何をなにしとる。何をなにしとるよ。」

「へゝ、裸はだかで立たつて居をりますので、御覽ごらんじませ、石磧いしかはらの中なかの柵ますのやうな、あの、もし、共同湯きょうどうゆから磧かはらへ上あつた處ところですな。」

「小女郎だな、小さいな。」

「十二三にも成りませうかい。」

「俺はな、番。」

「ばん、鵓　へい、あゝして、フツクリ

と白く立ちまする處は、もし、鵓よりか白鷺の方が、

こりや見立てであせうかな。」

「馬鹿、馬鹿、番、馬鹿。」

と、一しきり言ふ事がこんがらかつて、やがて吹

切つた大音に、

「馬鹿め、番とは、番頭、汝の事だ。生意氣を言

ふな、何が白鷺だ。俺はな、番。」

「へい／＼。」

「潔く返答したな。俺の目には、あの素裸の小娘

の立つた形がな、酒呑童子の蠟燭に見え

るが、何うだ。」

「よ、よ、本阿彌、此は御鑑定。」

と拍つた手を頻に揉みつゝ、

「あ、あ、何をなさります、勿體ない。」

來權は、のみさしの金口を、其の崖下の磧を臨んで投げた、かと思ふと、火をつけて一口吸つては、新しいのを、新なのを、あとから／＼すぽん／＼で、「火をつけて燃したるか、蠟燭に――」
否、否、火よりも、もみぢが散つた。木の葉は、温泉にも、其の娘にも。

「や、又浸つたな。」
と何を思ふか、來權は、ドカリと其處へ、小さな尻を大幅に踏開けて腰を掛けた。

「番
」

「へい。」

「氣に入つた。其の呼吸を忘れるな、番。」

俺は又新しい發見をしたぞ。あの杵形の湯船から、ふら／＼湯氣の立つ中へ、すぼりと白い奴の入つた形は、何うだ素焼の爛徳利
秋絃館の寶物とは何うぢやい。」

「よ、よ、よ、本阿彌、御鑑定。」

「馬鹿、賞めるな、汝の内の銚子の悪口を言はれ

て居るのだ。が、あの徳利を思ひ出した。湯に入つ
とる裸はだかの小女郎こめらうと同じ形かたで、來權らいごん、此この處ところで一杯飲
むぞ。銅壺どうこに湯ゆを入れ、銚子てうしを即座そくざに運はこんで來こい。
火ひの用意よういしろ。湯氣ゆげを立たたせる。ぬかる
な、番ばん、行いけ。――え、疾はやきこと風ふうの如ごとしぢ
やい。行ゆけ。」

で、きよとつく番頭ばんとうを下目しためで睨にらむと、狭せまい眉間みけんに
青あをい筋すぢを畝うねらすこと蜥蜴とかげの如ごとく、
「行ゆかぬかい。罷立まかりたてい。」

「はつ。」と言いふと、與よ八はちは突飛つぎとばされたやう
に、石塊いしころさか坂さかを舞まつて下りたが、庚申塚かうしんづかの前まへで、吻ほっと
息いきして、立停たちどつて、一度振返どぶりかへつて見みて、小股走こまたばしりに
驅出かけだした。

言出いひだした事ことは通とほさにや置おかぬ。――尤もつとも程度ていどで
はあるけれど、須卷すまきの橋はしの崖上がけうへへ、銅壺どうこぐるみ銚子てうし
を取寄とりよせるぐらゐは何なんでもあるまい。

其處そこで微醉ほろよびに成なつて、見物けんぶつは面倒めんたうだと引返ひつかへして來き

た、――

その來權が、内湯の故障のため、此の庭の湯へ、然うした美女とゞもに浴したのである。

事を起さねば可いが――
果してはじめた。

「熱い、やあ、熱い、湯玉が迸る

と――二度めに入つて又しても尻から先へ匆上つた――懷中は温つても、來權はぬる湯らしい。

「何ぢやい、逆杉は植ゑよつても、八幡太郎は、奥州街道、旅先で貧乏したらう。弓の尖なんかで、岩をつゝいて、漸と冷水にありついた大將ぢやい。待つてる、來權は、唯今黄金の延棒を抱へて来て、搔廻いて、湯加減をして入るわい。」
と脛を突張り、蛙股して、づか／＼と上り場へ。

お饒舌らしい、女中の其の肥満女も、婦人に對し、とばかりに氣を兼ねたか黙つて居たが。

「やあ、いゝ匂だ、吃驚ぢや
と、婦人の脱いだ衣類の傍へ、我が廣袖を着に、
ひよいと出て、なぞへな床とて、濡足につゝと突に
ると、力チリ。」

「や、踏んだ、簪
と明さきへ、突出して撓めて見た。薄色珊瑚の七
分珠、黄金脚の簪を。」

くるりと廻して、耳の處へ、うしろ状に押立て、
「土足にかけた簪は挿せませまいな　ー　貰つ
て行く　貰はうかい。」
と又耳を押立てた。

湯の中に居る人なれば、玉を溶かしたやうな聲し
て、

「御随意に
「やれ、貴女。」と女中が魂消る。
「うむ。」と、もう一度、耳を押傾け、きら／＼
簪を光らして、背を反るやうに捻向きながら、
「踏んだ簪ぢや　挿せまいでな、貰つて

行く、貰ひます、貰つて行くで

来るすごんきち
來栖權吉

郎、來權、貰ひますが、何とぢやい。」

「何うぞ、お持ちなすつて」

「水が映つて、硝子窓の珊瑚は、美女の身を離るゝ
のを悲しむが如く、流に影を揺がした。」

「へい、御免」

裏階子を上つた處から、廊下の片隅の障子を開けて、ぬいと出た番頭與八が、宿帳と硯箱を片手に、支膝の片手づきして、客の風體をじろりと視た。

日は最うかげつて、水の碧さもやゝ黒い。流の瀬は颯と一際白く成つて、影のやうな鷺が、二羽ならむ、すい／＼と流さるゝやうに泳ぐ。

も俵も鋭く巖の形に見える堰の上に、あとの五六羽が、例の雄鳥羽にづらりと並んで、嘴の下から黄昏れかゝる、山寒き巖の錦葉は、霧の裡に星を鏤めてもしたやうに色を凝したのを、瀧を横に、眞下の棧橋に向つて、渡る人をなつかしむ、一人旅の状おのづから顯れて、床の間を背に縁の端近に火鉢を抱き、貸廣袖で卷蓑を吹かす一客がある。

當日秋弦館の店頭がらんとして、土間の框の鐵の

大火鉢の灰白く、恰も店飾に似た、仲仕切の柱時計の眞鍮の簾のやうな分銅が、寂しい水車のやうな音を立て、裏川の瀬の音に響きながら、緩く左右に靡いて、折から人影もなかつた處へ、山家は自動車轍も静にずつと着くと、黒い中折帽に同じ外套を着て、此の客は唯一人扉を下りた。

が、買切つたものでない。――西那須野で専用の仕立だと、一直線に馳つて来るから、方々の湯宿々々で、大抵其の到着の時間が分る。丁と店頭へ見計つて出て待つてるのだけれど、乗合と成ると、来る途中處々、新鹽原で一人、瀧へ一人、福渡戸でふたり――何處かへ又一人。やあ、忘れものだ蝙蝠傘、待つてくれ信玄袋と、呼返すわ、留めるわで、殆ど豫算すべからずであるから、立違つて右の通り、で、誰も居なかつた。

「お客様だよ。」
氣のいゝ運轉手（一人ひとり）で、扉を開きざまに、其處にあつた鞆を引提げながら、客の横に添つて然う喚いた。

ト寂寞しつゝ、嵐の如く瀨が響く。

客は、たより無さうに時計を見てゐた。

「えゝー お客様

「へい。」

漸と返事をして出て来た女中が、遅かつたかほりに、早や臺十能に火を入れた奴を手にして居た心得たものである、且つ以て鹽原は炭が廉さうでたのもしい。

「お世話に成るよ。」

「へい、何うぞ

運轉手が、

「旦那、御緩り。」と、鞆を框へトンと置く。

此室へ通されて、やがて一浴したのである。最う此の時は、お約束の落葉を掻いて、笥の口を拂つたので、内湯は出て居た。

とばかりで、鞆一つに、帽と外套、いまは最う誰のも同じ貸廣袖で、髯も生えて居なければ、目金も

掛けない、頭も元げて居ないし、なりも中脊であるから、與八番頭のじろりの瞳にも何等の特徴も映らなかつた。

時に番頭さん、寧ろお前さんのなりふりと言ふのを、一寸記しておく要がある。

鼻はひしやげても居ないが、長面の中のしやくれた、頤の突出た、角刈で、眉が薄い。大阪の何とか言ふ俳優に似て居る。紺の鯉口の上被を着て、汚れた紺足袋、鼠色のめりやすの股引をぬつと穿いたまでは仔細ないが、其の上被を、帯の上で掻合せて尻から萌黄眞田の紐を廻して、前で結んで、妙に艶のある黒の前掛をめて居るではないか。

「へい、お疲れ様で。」

客は湯上りのいゝ心地に、膳の上を待ち兼ねて、内證で意地汚を遣つたらしい、
魔法壇を
一寸火鉢のうらへ押した
煎茶々碗に酒の
香が芬とする。

「へい、お日和で結構でございますな。」

「いゝ、天氣だね。」

と客は、しかし薄寒く成つたか、障子をしめながら襟を合せた。

「一足でも踏出すと、旅ぢやあ降られるのが何より難儀だよ。」

「お然やうで えゝ、此の鹽梅では當分

お天氣續きでございませうな。」

「いゝ時に來たよ それに思つたより立籠んでも居ないやうだね。」

別に、言ふ意味に室の不足らしい様子はなかつた」

「最も上客を待つべき佳い座敷の空いて居る事は言ふまでもなからう。」

「丁ど昨日今日あたりが間の時でございましてな、昨日などは手前どもでも、東京の學校の團體が二百人以上と言ふ混雜でございましてな、

湯場はそれに連れて、何處も満員でどん／＼、」

と勢よく言ふ聲が少し掠れて、

「お断りをしますと言ふ騒動で、立派な方で、貴客、止む事を得ず野宿をなさる方もあれば、御婦人づれで、夜一夜、西那須野まで、ふら／＼歩行いて歸つた方もあります始末で、こゝん處だけ一寸すいて居りますのでね、もみぢ時は何時も大層な人出でございませう、へい。」

「それは、いゝ處へ来た　ー　お庇でお世話に成れると言ふもんだ。」

「御緩り御逗留をなさいまして
「緩り逗留と言ふ柄ではないがね。」
と苦笑をしながら、火鉢に一寸手を翳した。

「あゝ宿帳かい。」

「は、何うぞ此へ　ー」

客は帳簿を受取つたが、筆を軽く手に控へて、

「此家の内に木谷と言ふ人は居ないかね。」

「木谷　　客人でございませうので？」

「いや、番頭さんだ。」

「番頭。」

俺だ、と言ふ顔色で、與八は頤を反して仰向けに客を見た。

「それとも御支配人か。」
「何だ、俺の他に御支配人、へん、と平ならざる鼻を、其の癖扁たく横に向けて、
「そんな人は薩張居まへん。」
「然う、似た人も居ないかね。」
と何故か、ふと澄まぬやうな顔をした。

其に用があるらしい、――實は此の座敷へ通つてから、二三度ものを運んだ女中に、客は湯に入る前にも同じ事を聞いたのである。それが、も矢張り知らなかつた。が、女中か或は臨時雇なぞで、様子が分らないのだと思つたらしい。再び其の木谷と言ふのを尋ねたのであつた。

「似た
番頭は、此奴、思違ひ、不心得の條があつて、其のものが居たら、御馳走に成るか、宿代を借る氣だな、と然う思つて遣り返した。」

眞田紐の腰を突張つて言つた。

客の答が案外で、

「名は忘たが五十ぐらゐで、

似たと言

ふのは狸だよ。」

「え。」

「狸に似た親仁だよ。」

察しても、此は、木谷

狸に似たそのも

のが、全然居ないと知つて言つたのに相違ない。

番頭は、はぐらかされたと思つて、笑ひ消した。

「あはツはツはツはツ、旦那御串戯を、いくら鹽原の山の中でも、當節は開けましてん、狸のやうな人間は飼つときまへんで。」

「然う一概に言ふもんぢやあない。」

温

泉ぢやあ、よく獸や鳥の名を好んでつけるぢやあないか。狐の湯、猿の湯、貉の湯は箱根にもあつたつけ。雁の湯、鳩鳩の湯、白鷺の湯か。

「あゝ、此家の内に、君。」

急に更つたので、

「へい。」
「と番頭は希有な顔する。」

三

「足洗ひの湯と言ふのがあるさうだね。」
「

「たしか、庭續きの別湯に成つて居て、此の谿河の磧から湧くんださうだ」

先刻、蛇を夢みた美しい婦が浴して、來栖權吉郎の來權が、其の珊瑚黄金脚の簪を拾つて取つた――其の庭の湯を言ふのであらう。

「梨影さんと言ふ、有名な、畫も上手だし、容色も美しい、婦人の畫家が其處で足を洗つたと言ふんだが。」

皆まで聞かず、しやくれ面の番頭は、萌黄眞田の腰を突立て、鯉口の兩手をしやつきりと膝に突強つて、

「何、何 そんな、そんな、あなた、今日、旦那、いくら有名なかくて、畫師の先生かて、あなた、へッ、御串戯で」

横に手の甲で鼻を擦つて、
「へッ、弘法大師ぢやあるまいし
ぢやありやすまいし、足洗ひ湯なんて、あなた、今
神様

日、旦那、手前ども大切な温泉に、そないな、あんな、今日、旦那
お剩に女やが、どんな晝
かきや知らんが、有名なて何やかて、足洗の湯な
んて、な、もし。」

と蔑すやうに、頤でしゃくつて、

「御華族方、大臣様、大成金の旦那でも、お入りに成らうと言ふ湯にやな、そんな名をつけて何ないしまんでい、阿房らしい。梨影さんの足洗湯、阿房らしい、そんな、あんだ、今日、旦那。」

「待つてくれ、一寸待つてくれ、」

「待つてくれ。」

客は、ふと氣色ばんだ、が、認めた宿帳をバタリと畳に置いて、袖を引そばめるやうに腕を組んで、與八の仰向けの鼻を熟々視た。暗さは其の穴から擴がりさうで、まだ電燈は點れない。

黙つて、巻蓑をつけると、

「いや、濟まん事を言つたよ。」

と此の時微笑した。

「悪かつたよ。」

「いえ、」

「眞に濟まなかつた、堪忍してくれ。」

「いえ、飛んでもない、へへへ。」

と頭の顛の薄い處を、額ぐるみ、五本の指で、ぴたりと撫でよ、

「決して、何も、あなた様が旦那、——何も、

そんな名をおつけなされたと言ふではあツせんで、飛んでもない。」

と、それだが、腰を張つた萌黄眞田は、けば／＼しく、

「しかし、あなた様にしてからが、そんな、あなた、今日、旦那。女の足あらひ湯と成りますと、あなた様にした處で、それで顔をお洗ひなさると言ふことに成りますと　でございますな。」

「弘法大師でも御免だよ。」

「はあ。」

「いや、偉い坊さんださうだから、即座にお断り

申すか何うか、其奴は分らないがね、足あらひ湯で
顔を洗ふと成ると、一寸考へるね 尤も、
私は不出来でも何でも、此の身體を貰った親たちの
いひつけで、湯の中で顔は洗ひはしないがね。」

「で、 でございますから致して、其の

「しかし、君、君がひどく、弘法様ぢやあるまい
し、がった、其の梨影さんの足洗湯と言ふのはだ、
梨影さん自分で然う名づけたんぢやあな
い筈だ。親類たちや、兄妹たちがつけたんでもなか
らうと思ふね。」

ふと聞耳して、話頭を轉じた。

「何だい、あれは。」

眞向ひなる三階の角座敷、大廣室の高い空で、殆
ど人跡の絶えたと聞く、會津街道の深山の眞中あた
りから ー 狼の唸るが如き、遠吠の聲に驚いた
様子である。

「へい、お金子が唸るのやさうにあして、東京のお大身で在らつしやいます。」

「いや、お忙しうからう、宿帳はつけました。」

「偉い憚様で。」

と聊か毒氣を抜かれた形で、しかし腰を押立てたまゝ手に取つて、ト斜違ひに帳面を障子の陰の薄明に撓めると、上目づかひで、變な顔をした。

東京本郷

町

番地、

菊山三吉、三十六として、ゑかき、と假名で職業欄に記したのである。

「へい、あなた様で。」

と襟に頭を引込めた。

「お構ひなく、女中さんにも頼んで置いたが、お膳の上で一銚子、燗を熱くねー、あとで君飲みに来給へ。」

「番ー番ー番。」

と其の三階の出張の廊下を、どゞどんと踏鳴らす

音が、廂落しにどろ／＼と響いた。

「番！」

「呼んでや、一寸御免やす。」

とくるりと尻を振つて障子を抜け状に、つつ掛け
穿の草履を片足、ツイと踏込つて、ひよいと後しざ
りに胸で留つて、

「番と吐くわい——へい、唯今

—

「え、御免下さいませやうに——お邪魔を
いたします、お粗末様で。」

「御主人ですか。」

菊山は其の容子を見て悟つて言つた。五分刈頭の、
づんぐりとした骨組のいゝ、大柄な男の、引掛けて
出た縞の羽織も質實なこしらへで、ふけては見える
けれど、何處かに稚顔の失せないほど、少くて純朴
な處がある。

のそりと座につき、一つ極つて、めりやすの太い
手で口を蔽ひ、次に軽く咳をする。を横
合をツと抜けて、女中が膳を引いて、大な尻をす
れ違ひに廊下へ出る、餘りしとやかでない體裁を、
首を捻つて額皺で見送つて、あとの障子を閉めた。

「今日は難有うござります。」

「飛んだお世話です。」

「一向に行届きませんで、はい。」

と大きく言つて、又口を壓へて軽く咳いて、

「えゝ、失禮でござりますが、貴方は千溪御先生に在らつしやるでござりませうか。」

客は廣袖の袖口を合せて、

「先生は弱りましたね、ですが、其の三吉ですよ、御主人。」

と、食後の煙草を取つて一寸向直つて、

「貴方は當家の若主人の方で在らつしやいませうね。」

「はい。就きまして、」

と妙な處で就きまして、羽織の裾を窮屈らしく少し捌き、

「以前、その、あの梨影先生が御入湯の時分、お目通りを仕りました、手前親どもは、農家の方へ隠居をいたしましてござります。はい、最早十四五年にも成りませうか、あの砌には、まだ手前ども、此の旅館は、農業の片手間に營んで居りましたやうな次第で。」

「尤も何うも早や行届きません、御婦人で在らつしやいまするし、かたノ」

「嘸ぞ御迷惑を遊ばした事であらうと、後に親どもも、
申しまして、恐縮をいたして居ります。」

「玉子ばかりだつたんですつてね、――其
の時は。」

「へい、何うも。」
と引傾いて、澁い中に私笑とする。

「話ですよ。――誰も食もの、贅澤をしに湯
治には來はしません。それに、梨影さん
も、見えたのは、あれは確か青葉の頃でしたね。」
「如何にも。」

「秋の上野の展覽會へ出品をしなされるのに、こゝ
の景色が欲しかつたんださうですから、私が言つち
やあ妙だけれど、矢張り修業のためですもの。――
不自由なんざ苦にはしません。否ね、却つてお愛
想の話ですが、澤庵のお香々が大層、よく壓がきい
て、いゝ心持だつたさうで、あの人、齒が弱いもん
だから、細く刻んでツて註文を出したさうです。深
切に細く刻んでおくんなすつた、それはいゝが、眞

白しろに一杯ばい砂糖さとうをかけてあつた、――「困こまりましたわ。」ツて内輪うちわな笑話わらひばなしでね。しかし、優やさしいぢやありませんか。「ですが綺麗きれいでございました。」

黄菊きぎくに初霜はつしものやうでした。
然さう言いつて居ゐなすつたから。」

「はあ――黄菊きぎくに初霜はつしも――歌うたのやうでござりますな。黄菊きぎく、初霜はつしも、どちらにしましても、手て前方へがた、差上さしあげまする御膳部おぜんぶ、第一だいのお取合とりあせにも成なりませうと存ぞんじますが、」

「さあ。」

と、恰あたかも鐵瓶てつびんの湯ゆは沸立わきたつが、菊山きくやまは煮切にえきらない返事へんじをする。

秋絃館しゅうげんくわんの主人しゆじんは、膝ひざについた太腕ふとを、少すこし乗地のりぢに突張つっぱつて、

「別べつして、梨影先生りえいせんせいお言葉ことばとござりましては、此これが當旅館たうりよくわんの名めいぶつに成なりまして、遍あまねく評判ひやうばん廣告くわいこにも成なります事ことと存ぞんじます。津々浦々つづ／＼に到いたりまするまで、はい。――え、早速さつそくでござりますが、手前てまへは

御覽ごらんの通りとほ、至いたつて、不骨ぶこつで、風流ふうりうに因ちなみましたお
言葉ことばなどは分わけて忘わすれ勝がちで困却こんきやくをいたします。が、
如何いかゞでござりませう、御先生ごせんせい、一寸ちよつとお一筆ひとふで。」

黙だまつて、度肝どぎもを抜ぬかれた顔かほをした。此この先生せんせいは、
思おもつたほど世馴よなれても居ゐないらしい。

「お手帳の端へなりと

あゝ、此處に硯

箱が。」

と床の間の傍に据ゑた机の上に伸上つた、が、まだ其は備へてない。

「待つて下さい。」

菊山は聊かものに動じた體して、

「御主人、澤庵に三盆白なら相應もしませうが、

それが歌言葉に成つたのを認めるやうな書家ではないんですよ。」

「はい、いえ、では、其が御先生のお得意の畫で

ござりますれば、猶ほ結構でござりまするので、はい、一寸黄菊に初霜と申す形容を。」

先生は、いまは却つて微笑んだ。

「御主人。」

「は。」

「書畫は集りましたか。」

「集つたかと仰せられますると？」

「今年、此の山々に石楠花が盛だと言ふ頃から、御計畫のやうでしたつけ。――亡くなつた梨影さんが、此處に逗留しなすつた記念と、それに、其の事が評判に成つてお家が繁昌をする報恩のためだと言ふので、東京をはじめ、關西、名古屋、九州邊、そのほか殆ど全国の知名な人たちから、畫なり書なり、歌、詩、俳句を集めて、お家の大廣間で陳列をなさると言つた、其の催の事なんですよ。」

と吸子を取つて、顔を見ると、

「はい、あの、木谷が伺ひました」

それ、出た！

狸が。――まだ雨戸

を繰らない欄干摺に、木の葉のさら／＼と瀨の響きに散込む音も、山の出湯の一興である。

「たしか此方の御支配人。」

「はい、其の節は又御先生に、種々御配慮に預りましたさうでござりまして。」

「何、配慮も何もありません、第一まだ差上げもしないんだから。しかし、あの、男は何うしました。」

「如何いたしましたか、此處久しく音信がありません。いづれ、東京邊には居ります事と存じますか。」

「はあ、大分御疎音」

と鐵瓶の蔓に手を掛けたが、のみ込みかねた面色して、

「あれは、御支配人なんでせう。」

「其の否、あれは書畫屋なんでござり

ましてな。」

「何だ、書畫屋ですか。」

と鐵瓶の手を、にらして、軽く火桶の縁を拊つた。

「書畫屋と申す條、あれは、」

と燈の暗影の方へ頭を背けると、いや其の影の大きいこと、瓢の炭取ぐらある。めりやす

の腕をがつしりと拱んで、些と俯向き、

「其の、種々事業なども營みますで。―― 最初
は何か、那須野ヶ原で屋根板の合資會社を企てる
か、當方面へ参りましたさうで。―― 一體が土
地のものではありません。宇都宮から東京、あの邊
を初終往來をして居りますが、何か御祈禱者の手曳
などもいたして新しい宗教なども弘めますで。いづ
れも思ふやうにも行かなかつたさうで、其中五六
點一寸しました書畫を持つて参りましたのが、手前
ども附合のはじめでござりました。

當家と梨影先生の事を、よく存じて居りましてな。
それほどの名旅館、此の上に向う發展を
試みさへすれば、鹽原全湯は一掴みぢや。何に、わ
けはない、梨影さんの記念、報恩のために營むと言
へば、立派な書畫は全國から、日光を飛越して、織
機の峰へ吹きつける。一骨折らう。―― 恚う言ひ
ますで、就ては先づ、皆様方、御先生にお目通りを
しまするに、唯頼まれたでは要領を得ないと申す事
で、其處で先づ、支配人分と

「分りました。」

と今度は火箸を徐に灰にさして、菊山は同情を籠
めた瞳で、氣の毒らしく主人の其の頭を視た。
「御主人、餘程お出しなすつたね、――
運動
費とか言ふのを。」

「否、然やうでもござりません。」
と鼻を皺めて、其の汗をぐいと拭く。

「何しろ、しかし荒廻つたね、當分のうち、あの狸は。――鹽原から雲に乗つて飛來んで來たやうでしたよ。今の其の日光の山越しに織機の峰へ書畫が吹きつけるツて言ふ話ぢやあないけれど。はッ御免、と聲が掛ると、最う玄關に眞俯向けに成つてお辭儀をして居て、忽ち膝行と云ふので、洋服の膝でずる／＼と摺つて入る。

勿論、折革靴を一個抱込んで居ますがね。

詰襟の紺の古ぼけた服で、色が黒い。眉毛がもじや／＼と生えて鬚髯がベツたり、目がぎよろんとして居る。「然うだんべい、でがんする」と言ふのを、甲高な調子で早口に饒舌つて、時々、「はッ」と言ふと逆に成つて叩頭をする。其の毎に、釦の外れた洋服の袖口を上へぐいと捲上げるのがお極りなんです。何故だと言ふと、其の勢よく發奮んで手を突く時に、ぱくりと袖口が疊へぶら下るからなんですよ。すぐに胸を立て、今の捲上げです。此奴が低頭平身を逆に喧嘩腰に見えて一寸凄いのです。そんな事に怯かされちやあ居られないから、此方も胎に落ちない處は、「し

かし御支配人」
と切込むと、勝手の悪い處は、
「はッ大先生」
――

弱りましたよ。

顔色と柄を見たつて氣

恥かしい、

「はッ大先生、何分鹽原在の、」
在のと言ひます。
「田舎ものでがあんするで、何も一向に心得
ましねえ、」
で、忽ち平蜘蛛のやうに成つて袖口
がだらりと下るかと思ふと、今のぐいと反つて捲上
げる
此の術で近い處は、私たち畫師夥
間の許ばかりも十方八面に東京中飛廻つた様子で
ね。
」

「何とも、はい。」
とばかりで、思ひ掛けない先生の饒舌り方に、呆
氣に取られて、ぽかんと仰向く。

「いや、決してお氣に掛けなざる事はない、此は
唯話なんです。――

要するに、秋絃館が當の主催で、此の秋殆ど鹽原中を擧つて、梨影さんの記念なり報恩なりに祭禮同様な式を執行する。そのために書畫を集めるから描けと言ふのです。――描きます――とそれまでは可かつたけれど、畫帖のやうな奉加帳の部厚な奴を突きつけて、署名捺印をしろと言ふのだね――（此の趣意に賛成する、何うか御厚意を以つて書畫とも御揮毫が願ひたい、）と言ふ口上の下ですよ。

處で、此の連名には、梨影さんの遺族、主なる親類、友人、それに同門の人たちと言ふのをづらりと並べる筈で、私は其の同門の中に數へられた一人なんです。――尤も事實です腕はくらべものに成らないでも、お梨影さんとは、同じ先生に御教育を蒙つた、きやうだい弟子なんですからね。

私は言つたんだ。――分りました御趣意も賛成します。拙いなりに、御揮毫を願はれる方は願はれませう。が、御揮毫を願ふ方は願はれますまい、

――お断りだ。――

「何か、はい、然やうさうでござりまして、

御先生、貴下様お一方が何うも と

恁やうに申して居りましたで、はい。」

「あゝ、お聞及びでしたか。」

「當時は殆ど一日おきのやうに、 木

谷は 東京と此地を往復いたして居りまし

たで。」

「壮に風に乗つたんですね、狸さん。――し

かし、それは何うも恐縮です。が、最初は私も然う

までは言はなかつたのですよ。東京だけの手近な處

を廻るのだらうと思つて居ましたから。それでも注

意だけはして置きました。 (内輪は内輪

だが、他所の畫伯方に此を頼むんなら、持込むと同

時に相當の謝儀を御持参なさい。でないとお梨影

さんの名をかついで利する處があるやうで、第一秋

絃館としても潔くあるまいし、――従つて身内

に取つても、爲にする處があるやうで撥たいから

最うね、此が御支配人、聊か意外のやうでしたつ

け。
レ

四

菊山は茶も注がずに尚ほ續けた。

「一度が二度、二度が三度と 御支配人」

分ですか、其の木谷が話を切込むんで来るのを聞く
と、何うして、近廻りどころの騒動ぢやあない。

右の趣意書に連名捺印と云ふのを活版刷比
羅にして、北海道佐渡から、壹岐、對馬まで撒かう
と言ふんだ。――此が雑俳、冠づけ、語呂合の
投書家に到るまでとす、勿論、御揮毫たゞ取さ

他人、友人は格別、――（そんな願人に、身う
ちのものが成れるものか、印を捺して謹白して、）
と斷つたんです。誰も賛成、彼も捺印と、大家方
の署名したのを目の前へつきつけて、是非と言つて
一日に三度も來ましたけれど、――斷りました。

斷つても肯かないから、（大將、蟲がよ過ぎる
ぜ、）と然う言ふと、（はッ何分鹽原在の田舎
者があんするで、一向もの事を辨へませんで、）

と、それ、平蜘蛛で袖口をずるりと落したかと思
ふと、恚う捲上げなりに腕まくりをした。――

（他へ故障は言はないよ、をぢさんも商賣だ、確り
やり給へ。）と言ふと、（はッ何分鹽原在の田
舎ものであんするで、）と私笑としながら、ま
た叩頭をしたがね、恐しく眞面目な顔して、ちよこ
／＼と膝頭で後退りに退つて行つて、坐つたまゝ帽

子を取つて、式臺を下りしなに冠ると、ポンと大跨に飛出して歸つたんです。其切さ——は。」「

と先生が獨りで笑ふと、妙な處で笑ふと思つて、主人は希有な顔をした。

先生は又笑つた。

「夏場は此邊へも廻つて來ませう。落語家の前座の蒟蒻問答見たやうだね。此は笑事です。」

が、書畫を集めると同時、種々計畫があると言つて、お梨影さんの記念碑を立てるの、地面を何のくらゐか、梨影田とか稱して、こゝで出來た米を供物にするの、至極結構な話でしたがね。」「

主人は目の覺めた顔をして、

「其、其は其の、」
咽喉を掠めて、

「あゝ、」
と言つて咳する。

「決して、そんな事の催促にも、様子
を視に來たのでもありません。唯其の中
に、浴室を一ヶ所新築して、此に梨影さんの足洗

「菊山は言掛けて一寸更つて、

「御主人、お梨影さんの來なすつたのは、二十二
か、三ぐらゐな時だらうと思ふんです。が、妙齡だ
し、婦人だし、唯一人ではありますまいね
私も、よくは覺えて居ないけれど。」

「はい。」

と、大きに手も懷中も寛いで、

「お三方とも、お二方とも申すでござりますが。」

「宿帳は保存してありませんか、當時の。」

「其でござります、其が何うも。」

と喟然として、天井を睨みながら、

「御入湯の夫人方お嬢さん方などは、分けて、お
床しい、とおつしやつて、其の宿帳をお尋ねでござ
ります、保存がしてござりません。何

とも早はやや心こころない事ことで。　　―　　元くわんらい來、隱居いんきよの代だいでござりませんが、あの方かた、御入湯ごにふたうの頃ころは、然さう申まをしては如何いかゞでござりますが、唯たゞお娘御むすめごとばかり存ぞんじましたさうで　　―　　尤もつとも、其その秋あきの展覧會てんらんくわいあたりから、別べつして御高名ごかうめいにお成なりなさいました御様子ごやうすで、はい、手前てまへもほんのまだ小兒こどもでござりまして。　　―

「しかし、狸君たぬきくんの話はなしでは、お梨影りえさんが、褌つまを取とつて、うつくしい白い跣足はだしで、此この溪河たにがはのへりを常とこ夏なつの中なかか何か歩ある行あるいて居あて、砂すなによごれた足あしを洗あらはうと、石いしの間あひだからちろ／＼水みづの湧わいて居ある中なかへ爪尖つまさきを入いれると、ヒヤリとした。其その水みづが温あたゝかい。

湯ゆが出でるのではないか知しら、穿ほつて見みませう、と連つれのひとが云いつて、鍬くわを貸かして頂戴ちやうだいな　　―　　で、爾時そのとき、（おつと來きた、）と納屋なやから其その鍬くわを擔かついで出でたのが少年衆こどもしうだ、此方こちらの。いま其その人の代だいに成なつた。　　御主人ごしゅじん、　　―　　貴方あなただと言いふ話はなしなんですがね。」

「はい、其それは確たしかに存ぞんじて居をります　　―　　と申まをしたいのでござりますが、何分なにぶん、少年こどもで。　　―　　爾その

時の、召ものゝ色も、錦葉を見れば、錦葉かな、櫻
を見れば、櫻かな。はい、今お話の、常夏を見れば、
常夏かなと、―― どれも唯幽にお綺麗など存じ
ますぐらゐでござりまして、御一所の御人数、おつ
きか、お弟子か、お友だちか、それさへ、よく覚え
ません。何にいたせ、秋絃館へ天降つて下されまし
た、美しい神様のやうに存じまするで、確に鋏を手
前がとは 正直な處申されませんのが残念
で成りません。尤も弟が一人 唯今は軍人
お庇さまで少尉に成つて居りますが、
其が一所に居りましたで、或は鋏を持出しましたの
は弟の方で、手前は、それを見たばかりかも分りま
せんので、はい。」

「あゝ、御主人、―― 急に其の湯へ入りたく
成りましたよ。」
と、何故か悚然と身に沁みたやうに袖を合せた、
面は白いやうに、酔も醒めたやうである。

「さ、さ、何うぞ

私が見え、私が直ぐ御案内。」

「就てなんです。――其の時の記念に湯殿の新築が出来たと言ふのは何よりですが、其をお梨影さんの足洗湯、と呼ぶ事にした、と言ふに就てなんです。――」

美しい方でした。

後に結婚をしてから

は、皆が梨夫人、梨夫人と言ひ／＼したくらゐですからね。雖然、神女でも天人でもありません。――

商賣敵ぢやあ悪口雑言をするものさへある、女の繪師です。――その足洗湯などは、就中、反感を起させ易い。お梨影さんも、あの世で、どんなに氣恥かしがるか知れない。氣の弱い人でしたから、胸を痛めて煩ひかねません。――此だけは御相談ですが、お見合せが願ひたい。」

先生は懇に然う言つた。

「狸君の話では、額をお拵へに成ると言ひましたが、それは最う新湯へお掛けに成つたんでせうか。」
「否、念入に東京へ誂へましたで、まだ出来上つては参りません。」

「それだと、いくらかお話が仕易いやうです。」

「――が、湯殿に打つて掛けてあつても、梨影女史足洗湯ぢやあ、諸國修行の劍術の手きゝ

でないから、私の力に及ぶか何うかは知らないけれども、願つても、それだけは引はづして歸らうと思つて來ました。」

如何でせうか。」

「えゝ、はい、それは最うお易い事です。で、ござりまするが、不思議に、あの、お美しい、其の御名譽な方が、おみだし下さいました温泉でござりまするで、格別の思召で、お名前の處は、何とか一つ

」

「結構ですとも、それに第一、身より血統ぢやありません、こんな我儘を言ふ権利があるのぢやあないのでですよ。――唯優しい姉とも、友だちとも、きやうだい分とも思ふ男の、心ばかりの事ですから。」

「と言も何となくしめやかに言つた。」

主人も静に熟と聞いて、

「よく相分りました。」

「早速、難有い。」と一禮した。

「あゝ、此は何うも。」

「すぐに、梨影の湯となさいな、差出たやうだけれども。――梨の影――さながらお梨影さん

の其の面影のやうぢやありませんか。」

前刻に、其の湯に浴した美女は、さながらに其の粧であつた。しかも満山の秋の錦葉の裡にして

姫池藤子ひめいけふぢこと言ふのである。

聞いても面影おもかげの俣しのばるゝ

前刻せんこく、

梨影なしかげの　　―　　最もう恁かう稱となへよう　　―　　其その湯ゆに、

もの越こしのほのめいた女をんなは、うたゝ寝ねの夢ゆめを何なんとなく

氣きにしたのであらう。座敷ざしきの電燈でんとうを稍やゝ離はなれた、床傍とこわき

の丸窓まるまどの前まへに、机つくえを引き寄よせて、しなやかな胸むねの、

ふくらみの見みえるまで、ぐいと凭掛よりかゝつて、其その癖くせ、

俯向あをむいて差覗さしのぞくほどもなく、筆ふでを輕かるく取とつて、たゞ

線せんを引ひくやうに、すら／＼と卷紙まきがみの端はしを染そめて居ゐる。

ふつさりした柔軟すなほな髪かみを、櫛卷くしまきに結ゆつたのが水みづが

垂たれさうである。緑みどりも藍あゐも、燈ともした電燈でんとうに蔽おほひもない

のに、その瓜核顔うりざねがほが湯上ゆあがりの薄化粧うすげしやうした、襟脚えりあしのく

つきりと白しろい艶えんなのが、薄様うすやうを一重隔ひとへたてたやうに、

あからさまでなく尚なほ床ゆかしいのは、すつきりと搔上かきあ

げては居ゐても有あり餘あまる、其その黒髪くろかみの影かげであらう。

浅葱あさぎの切きの小枕こまくらに、新あたしい枕まくらあてしたのが、其その
まゝ戀歌こひうたに成なりさうに、シイツを掛かけた蒲團ふとんに乘のり
つる、寝ねみだれ髪がみが未まだかゝらねば、讀人よみびと不知しらの體てい
がある　　ー　　寢床ねどこは最もう延のべてあつた。

枕頭まくらもとに繪入ゑいりの雜誌ざっしが二三冊ざつ。

藤子ふぢこは、既すでに寝ねるばかりに、帶おびも衣桁いかうに掛かけてあ
る。　　其そのまゝ搔卷かいまきを被かくのか、もう一重へ
脱ぬぐのか知しらない。伊達卷だてまき一つで、背負揚しよひあげも紅くれなゐの紐ひも
も解といて居ゐるからくの字じの膝ひざは崩くづれないでも、裙すそは
座蒲團ざぶとんの上うへをすらりと流ながれて、紅入友染べにいりいうぜんの長襦袢ながじゆばん、
あちこち、ちら／＼と花片はなびらの水みづに柵しがらむやうで媚なまめかし
い。

ありさまを其そのまゝに、畫ゑに成なるものを、玉章たまみを
認しためて居ゐるのでない。藤子ふぢこは、筆ふでのはこぶまゝに、
矢やを描ゑがいて居ゐるのである。

矢一筋やすぢ、二筋すぢ、三筋すぢ
待まて、早はやくあとを描かかないと、此この風情ふぜいでは、羽はね

が折れて、三味線に成り兼ねない。

四筋、五筋。

但し矢と言ふが、こぼれ松葉に絲をつけたやうでもあるし、艸の字を一つ離れたやうでもあり、簪で耳を搔いた形もある。

「ほゝゝ。」

と獨りで笑つた。

それでも、矢数を、其の上に十ばかりも弓なしに散して居たが、項を白く、一寸振向いて寢床を見た――此の影法師がもし障子に映ると、其のまゝ名畫の鶴に成らう。

「もう寝よう。」

かの、其らしかつたが、ふと掛蒲團を見て、矢のあとへ、掛蒲團、と假名でかいた。

羽二重、と又記した。

模様

松と櫻

――

松、濃い翠。

花、

緋櫻。霞、颯と掛けて紫のぼかし、皆々鹿の子入――と續けて記した。

襟は黒縹子、と尚ほかきとめながら、何故か氣乗
がしたやうに、密と翻して、其の掛蒲團の裏を見る
と、薄萌葱である。

裏、薄萌葱、と記した。

唯、此の黒縹子の襟に、下へ襲つて、同じ襟は、
例の取替へる切で眞白だけれど、柔く、こつた搔卷
の肩當が。

「此は綺麗だね。」

紅の二條格子、中の地を、眞白と縦横に劃つて、
白と、紫と、冴えた納戸と、朱鷺色に染分けて、一
劃ごとに、大輪の一輪櫻と、咲かさなつた小櫻を、
淺葱と桃色で染出して、處々に、燃立つやうな鹿の
子の胡蝶

と筆で映して、恍惚と見た、

姫池、藤、ふぢ、ふぢ ー

と其の搔卷へ、我が顔の、仰向いたやうに巻紙の
あとへ記しながら、藤子は莞爾したのである。

藤子は 其のまゝ筆を返して、軸で指して、字つきで素讀をするやうに、閨の紅と翠の上を辿つたが、

「これは、日記でも覺書でもない。」

消して、（ない、）と言ふ處を、

「――ありません。」

と訂して、ふぢと又名を記した。

掛蒲團、羽二重、模様、松、濃い緑。花、緋桜。

霞、颯と掛けて紫のぼかし、皆々鹿の子入

搔卷の肩當は、紅の二條格子、中の地を、白と、

紫と、冴えた納戸と、朱鷺色に染め分けて、一劃ご

とに、大輪の一輪櫻と、咲き重つた小櫻を、淺葱と

桃色で染出して、處々に、燃立つやうな鹿の子の胡

蝶と讀返して、

「まあ、繪の具のやうに夜具の彩色を並べたら、

矢羽は皆眞白のやうなこと。」

と、うつかりしたやうに言ひながら、

姫池藤

と其處に顔の見えるやうなのをもう一度讀返し

つゝ、

菊山

と、――ふと記した。

菊山先生。

菊山さん。

菊山三吉。

「可愛い名だこと。」

と紅を含むやうに唇へ聲を染めて熟と視た。

――あの、梨影の湯について入った、お直と言ふ、どつしりものゝ女中が、此室の夕餉について給仕をしたのは、與八番頭が、菊山の其の宿帳を受取つて、若主人に傳へると、此は、と言つた、帳場へ響いた名だつたのであるから、給仕の伽に、其のお直が噂話をした事と、此處で一寸想像して置く――

唯、ハツとしたやうに身邊を見て、色立つ衾を見返しながら、ほんのりと臉を染めると、ふけを搔か

うとしたのであらう、一寸頭に手を遣つたが、さし
ならした珊瑚の珠は手に觸れない。筆の軸で二三度
すつ／＼と毛筋を分けた。

「來栖

何とか言つたね。」

來栖

權

と、ふとしたやうに、

むだ書をしたと思ふと、ぐいと其の上へ眞黒に棒を
引いた。

あとを、矢繼早に、また、ばら／＼と、例の松葉
に似た矢を書き散す。

お直が其處へ――

「あれ、貴女様。」

「お直さん。」

と入口を見遣つた、机の上の片袖で、打蔽ふやう
にして、藤子はくる／＼と紙を巻いた。

「あれ、まあ、」

と仰山なのも露骨の深切で、

「まだお寝りもなさんねえで、かぜでも引くと成

りましねえ。」

「大丈夫ですよ、ばか／＼するもの、よく暖るわ

ね。」

とそれでも薄色の半襟を引合せる。

お直は、もこ／＼と火鉢へ膝行つて、

「鐵瓶さ、沸立つたのを取替へて來ませうでね。」

「否、最う可うござんす 寝てからは、

然う飲みませんから。」

「はあ、あれ、まあ、お羽織をこんなげに、不器用だが、一つ疊みますべい。」

衾の裾から、のつこりと衣桁へのすのを、

「可いの 可いんですよ、廊下へ出るのに引掛けますから。」

と袖口がちらりと搦んで、白く留める。

「でも、はい、あゝ、何たる佳い薫だね。ほう、此の移香で寝しなの湯へ入つたら、風呂から香水が湧きますべい。ワッ。」

心得て居ながら吃驚顔。

が 呻^{うな}つた。
ま^{うへ}上なる廣^{ひろ}間^まから、うゝ／＼うゝ／＼と來^{らい}權^{こん}の鐘^{かね}
―― 水^{みづ}に響^{ひび}いて夜^よ十^{じゅう}暗^{あん}か。

三

ね。――
來^{らい}權^{こん}の旦^だ那^なが、御^ご自^じ分^{ぶん}でも、玉^{ぎよく}、寶^{ほう}石^{せき}類^{るい}
で、其^その、それでもし、何^{なん}だす

は澤山たくさんに手てに掛かけておいでやで、そら、能よう分わかりま
すな。――それからだすな、私てまへもこれ、少すこしは
年ねんき期きも入いれて苦く勞らうした事こともあるですよつて、改あらためて
な、もし、旦だんな那なの手てから、手て渡わたしをされました時とき、
ちやんと拜はい見けんして吃びつくりぎやうてん驚ぎやうてん仰やうてん天てんや。えへへへ。」「
と世せ辭じ笑わらひをして、番ばん頭とうの與よ八はちが、

「えへへ、湯ゆどの、揚あがりば場ばで、踏ふんだよつて、足あしに
かけたものはお頭つむりへはのせられんやろ、おくんなは
れ――何どうもな、言いうた旦だんな那なも旦だんな那なやが、右みぎ唯たゞ
一言ごんで、あゝお持もちなさい――おつしやつた貴あな
女たさま様さまも貴あな女たさま様さまや。私てまへは吃びつくりぎやうてん驚ぎやうてん仰やうてん天てんや
」

いや、其その吃びつくりぎやうてん驚ぎやうてん仰やうてん天てんよりも、簪かんざしを與よ八はちに對たいし手て渡わた
しつてまでひけらかした時ときの來らい權ごんの鼻はな息いきが思おもひ遣やら
れて凄すじせい――

「大たい枚まいな、高かう價かなものや――近ちか頃ころは翡ひ翠すい玉たまよ
り、萬ばん端たん何なに事ことも珊さん瑚こだすかい。お剩まけに古こ渡わたりだすか。」「
と何なにか改あらたまつて、唐たう棧ざん柄がらの羽は織おりを引ひかけて居ゐる。紐ひも
につけた擬まがひらしい青あを玉たまの環わをひねくつた。

それで居て、前垂掛、萌葱眞田を漏して居る。

「――貰ひます、上げますとな。へい、謎を

ひくりかへしたやうな事で、然やうならで、今日、
貴女様、濟む譯のものではありません。――な

い――（と手を敲いて）そりや、ない、貴女
様。――其處で、へい、え、來權旦那からの

な私。

「といま膝を敲いた手で、羽織の袖を開き、ポンと

縞目を弾いて、

「もし、一寸お使者と言ふ處ですが、えへ。」

と笑つた――

――來權が例の奇聲を發すると、續けざまに四

つばかり呻つた時である。變に廊下を小

刻にツツと來る跽音が、前で留つて、御免とも言
はず、座敷へ此の番頭が入つたのであつたが。

口上の生ぬるさに似ず、目が悪狡く、くる／＼と

働いたので、藤子は黙つて、靜に聞きつゝ、聞きつゝ、
らく書した巻紙を、きゝと幾つにも裂いて居る。

「就きましては即ち、其の此だす。」

と鼻の下を伸して、きよろんとした目で、己が懐中を大仰に覗きながら、頤で見當を取つて、其の頤で寸法を引き、すかりと引出したのは、糊入紙の包大なり、紅白の水引反つたり。

一膝乗出し、

「其の此だすな。――此を其の、え、來權

旦那から貴女 姫池様へ。」

と言つた。――次手に記すが、年紀は二十四である。恚る藤子が、宿帳へは學生としてあつたが、夫人――令嬢――秋絃館では、容易に見當のつかない處から、大概は貴女で呼んで、ともすれば與八などが、其の姫の姓を言ふのである。

「え、失禮ながらと言ふのであして、私其のお使者にな、へ、へ、へ。」

と指で刻んで、一封を疊へ押した。

衣摺がして、少し居直り、

「然う、あの簪を、改めて返しに來たの。」

「いえ
えへ、貴女様の思召、又旦那の
お心持で、えへへ、其の何となく、え
へへ、あのあのまゝに戴いて置く事になされました
で。へい、此は其の」

「では、お目録ね。」

「へい？」

「あの、お目録ですか。」

「は、何でございますか、現、現、現金で。」

と與八、人柄も辨へず突走つて、

「紫色のぱつとしました處を、ちらりと見ました。

で、二三枚、へへへ、驚きましたな。」

と唾をのみ、唾をのむ。

「いりません。」

「御串戯」

「いへえ、いりません。」

「え。」

「受取りませんよ。」

「や。」

「持つてお歸りなさいまし。」と身を斜めに、
コトンと硯箱の蓋をした。

番頭はきよとんとしながら、二つ三つ頭を押へた。

「無茶や、そりや、貴女様、こないな大金を。」

「お直さん、然う言つて頂戴な、私は可厭なんだ
から。」

羽織を亂箱に、扱帶、帶留をうつくしく揃へたお
直が、其の大枚を可厭だと言ふ、心のほどは合點行
かねど、御意のまゝに、ずんぐりと膝を突向け、

「番頭さん、あのやうにおつしやるもんだで、一
遍持つて去なつしやいよ。な、番頭さん。」

「黙つて居れて。」

「が、黙り居らう居丈高な權幕で、

「へい、えゝ、もし、痩せても此館の支配人が、
羽織を引被けて參つただすでな。然よか言うて引込
みましては、旦那に顔向けも出来まへんが、一ツ御
不足だすやるが、へつ、こんな顔でも顔に免じて下
はつてな」

此の答は簡単であつた。

「私、寝ますから。」

「え、」

「私、寝ますから。」

「や。」

「寝るんです。」

「いえ、しかしだすなあ

「寝ますよ。」

と、ツ立つた、急な身じろぎに、白い脛が、ちらりと散つて、ぞろりと裙を曳いた姿が、友染を亂してふつと浮いた。藤子は、一足出すや否や、バツと電燈を消したのである。

「あゝ此は。」

と言つた。――しばらくして、くらがりの中を、もそ／＼。は、は、ふん／＼と留南奇を嗅ぎつゝ、這廻る氣勢して、

「もし、いえ、もし、貴女、姫池様。」

もし、貴女、へ、へ、
與八だす、へゝゝ

ワツ、何をなにする。」

と藤子ふぢこが言いひさうな言ことを番頭ばんとうが喚わめいたと思おもふと、
どし／＼と畳たたが響ひびいて、づんづんと廊下らうかへ出でたのを、
遠灯とほあかりで見みれば、遅たぐましいお直なほが片手かたてで、むずと帯おびを引ひき
掴つかんで、番頭ばんとうをぶら下げたものと思おもはれる。――
ばた／＼泳およいで■はねる手てを、又また片手かたてで、お直なほが、
ぐいと取とつて釣つるして、すた／＼

—

「番！」

「へいッ。」

「退れ。」

「へい。」

「退れ、退れ」

「疊を六尺ずつ退れ。」

「へい／＼。」

と與八は疊を、其の通りに摺退る。

「其處で、更めて口を利け、白痴めが。」

と來權は、銅製の驚馬に似た鱗鱗の置ものゝある床の間を大きく背負つて、脇息に乗掛つて、

「使して君命を辱しめると言ふは汝だい。」

背後に鹿の角の刀掛があるか、紫の袷紗で佩刀を持つた小姓が控へて居て見ろ、座も退らせずにはばりと汝、眞二つだい。」

「まるで西瓜やな。」

と顰めた面をして、與八は縦に頭に手を置く。

「生意氣吐すない。」

斬つた處で赤い血

の出る奴か——汝其の薄汚い黒い筒袖で、尻邊にちよぼりと青いものを見せた處は、山牛蒡に似さらす。
牛蒡野郎。

とじろ／＼と視て、少時寂寞、谿河の流が、きら／＼と朝霽の陽に輝いて、陽炎の如く、天井に映る。
忽ち大音を上げて、

「番！」

「へいッ。」

「第一、汝、使者に立つて、復命をするのに、一晩放つて置きは何う言ふ譯だい。其もだ。旦那のお目覺を待構へて、早うに來て申上げでもすればだが、不味い朝飯を召食つて不味い朝飯と云ふんだい。不味くないと言つて見る、唯は置かんがい。」

「えらう濟みまへんで。」

「な、其の不味い朝飯を召食つて、バツ、ぶく／＼だ、嗽と洗濯を一緒にして、くわつと、機嫌直しに爽かな空気を吸つとる處へ、牛蒡を縦に這はしをつて、何だ。――先方で突返した、何だ先方が突返した。最う一度吐して見る。」

「え、其が其の何でやして決して其の突返す突返されたと言ふのもござりません。――實は首尾よく、用が濟みましたのやつたら、すぐに、昨夜のうちに廊下の外からでも申上げるのでござりましたが、其の邊が些と込入りましたもので、私が、お使から歸りました時は、旦那は最うお寢みでござりましたでな。」

「其の通りだ。返事は聞くまでもない、二言とも言はず別嬪は受取るものと思つたから、旦那おやすみに成つたんだい。」

「さ、其處でござりますから、お起し申上げて、

いざござをお耳みみに入いれますも如何いかと、御遠慮ごえんりよをいた
しましたので。――今朝けさも朝御飯あさごはん

「不味まずい！」

「へい？」

「不味まずい朝御飯あさごはんと言いへ。」

「えへへ、不味まずい朝御飯あさごはん前まへから、矢張やはりいざござ
をお耳みみに入いれましたは恐縮きやうしゆくでござりますので、えら
うお返事へんじの後おくれました處ところは、何なんばにも濟すまん事ことに
ござりますが、何分なにぶん其その先方せんぱう様さまで、」

「突返つゝかへしたんだい。」

「でござりますが。」

「突返つゝかへしたんだい。――突返つゝかへしたは別嬪べつびんの勝かつ
手てだが、番ばん、番ばん――來權らいごんとまで言いふに
は及およばん、權ごんだ、唯權たごんだ、權ごんと言いへば鐘かねが鳴なる
鐘かねが鳴なれば十里り八方ぱう那須野なすのヶ原はらへ筒つゝぬ拔ぬけに響ひび
き渡るわたほどの俺おれが突返つゝかへされて濟すむと思おもふか。此この白たは
痴けめ、やい退さがれ退さがれ、もう三尺じやく

「

ひよいと腰を浮かしたと思へば、脇息をドシンと
撲つて、

「退つたら、面を上げい、面を上げるい。うつ、
いや其の面を見ては噴飯さずに居られんわ。汝唯置
く奴ではないが、其の面に免じて生命だけは、助け
て遣る。」
旦那、聊か御立腹を弛めて取ら
す。」

小窓に寄せた、擬の黒檀の机の上から障子の棧へ
斜に立掛けた、あの珊瑚の金脚に、其の黒檀が黒髪
のやう映添ふと、朝掃除のあと清うして、水の響は
宛如盆畫の銀砂子か同じ机に敷くやうな、簪の風情
と、與八の平伏つて、ぬいと上げて居る突出た頭と、
脇息の横に差置いた、何うやらぐたりとした例の水
引の包を、等分に、鎌首に似た顔でじろ／＼と睨廻
して、

「番、大分、此の包は皺に成つた。」

「へい、彼方、此方へ持廻りましてん。」

「彼方、此方ぢやあない、汝、昨夜一晚、此包を懷中へ抱へて寝たらう。」

「お見通しや、えへ。」

と少し息を吹いて、兩手をばた／＼と媚びるやうに煽つて掉つた。

「一生に一度の思ひです、あやかりたい存じまして。」

「抱きをつたな。」

と取つてフン／＼と嗅ぎ、鼻柱が皺めて、

「臭い、抱いたは可いが、汝、禪に挟みはせんか

い。」

「何も成りません。滅相な、で、ござ

りますがな、旦那。」

「ほか／＼と暖かつたかい。」

「へい、晃々と後光が射しまして、後光の裡に旦那の御顔が拜まれましたで。」

「茶羅吐かすな、——御大將のなさるゝ事は

賞罰が明だ。へまな奴に一錢の祝儀も與れん、然う
思へー ー 番、 ー ー 時に一旦水引を掛けて出
した此の包だ。
俺が此まゝ、引込めるも
のだと思ふか何うだい。」

「そら、そら、そら、旦那様の事だすで。」
と、ごくりと唾を飲んで、思はず、膝を乗つて出
る。

「むざ／＼引込めるとは思ふまい。」

「勿論ですが。」

「汝に遣るとでも思つとるか。」

「
」

「面を見る、白痴め ー 御大將のなさるゝ事
は賞罰が明かだ、汝には十分に嗅がせもせんわ
無論、別嬪の許へ、同じ口上で、又持つて行
く法はなからう。しかしだ。金子も遣らずに簪を取
つて置いては、來權の名譽にかゝはる。」

處を臨機應變だ。御大將のなさるゝ事は ー ー。
馬鹿も使ひやう、白痴に手柄をさせて遣る。其處が

俺の働きだい。一御大將の智略を見せて遣らう、番、出る、前へ出る

い、三尺進め。二階廊下の曲角の座敷へ

昨日来たのは畫師だと言つたな。」

「然やうで。」

「其奴、錢は持つとるまい、何うだ。」

「そら、旦那、然うですけれど、まるで錢なしでは、今日、貴方様、湯治に來ると言ふわけにも参りません。」

「鈍な聞きやうをするな、白痴が。誰

が無錢遊興をすると言つた。うむ、宿賃を持たんとは誰も言はん、が、貧乏人だろ、金子はあるまい、と言ふのだい、何うだ。」

「そりや、最う、言ふほどの事もありまへんで、旦那様など、較べました段にはな。」

「馬鹿！俺と較べるなら、富士山でも持つて來い。奥州筋の山なんぞは凸凹さ加減が邸の階子段ほ

どにもないのだ。
貧乏びんばふにも
よりけりだが、
其奴餘程そいつよほど
しみたれだらう、
――
俺おれの眼まなは明あきかだ。
「

胸も頭も、來權は、金口の煙草の煙も、脇息の上へ突出したが、

「今朝だ！ 前刻よ 此處のおもの見から、御大將、殿様がな、下界の土民百姓儕を瞰下して、下情と言ふのを察して居ると、其奴だらう。

廣袖を借りても、肩身は細い、しよばけた態をして、廊下はづれへ、のこ／＼と後姿で手拭を提げて 顔を洗つたか、浴室からか歸つて來たが、欄干に手拭を掛けたまゝで、角座敷へ引込んだ。――ばかりでない、引込むと其處の障子を閉めた。 あはれなものだ、此の爽かな朝でも、懷中が寒ければ身に沁みるで冷えると見える。或は恐れ多いとあつて、おもの見の俺を憚つたかな。まだ可笑な事にと、身分の軽いと言ふものは、絞つたばかりで手拭の濡れた奴が、少しの風に、谷川の空で、木の葉と一緒にへら／＼と吹かれて動くわ。

むふ、 其處へ行くと來權の用ふる夕才ルなどは、横綱の化粧廻よ、大地震が四股を踏んでもびくともするもんでない。――然うすると何うだ、其の手拭さへ、ひよろつく處へ、廊下の曲

角をのそりと廻つて、番、汝、其の押立牛蒡で薄汚
く其處へ顯れたらう。顯れたは可いとして、汝、爾
時廊下へ雑巾掛をして居たんだ。雑巾掛

をするのに何うだ。痴人が櫛を踏むと言つた形で、
兩腕を拱んで押立ちながら、汝其の頤で、つい／＼
と見當をつけて、踵で踏んで足で雑巾を廻らかいて
摺歩行いて居をつたらう、何うだ、番

「ひよいと面を上げると、おもの見の椅子に俺が
居たのを見て、反して横を向いたわ。右の手拭を流
省に掛けて、べろりと舌を出して、それから四這に
這つて、雑巾を押しはじめた。番、何うだ。」

「えらい、何うも えへ、えらい、何
うも濟みまへんで。」

「いや、濟むも濟まんもない、其處の
事だい。あの畫師が、然るべき歴乎とし
た先生か、然うでなくても、少々工面の可さうな
男なら、其の座敷の前で、足で雑巾掛の出来るもの

ではないのだ。――分つたか。其處で貧乏畫師と蹈んだ、可いか、汝が雑巾を蹈んだ如くだ。何うだ、それでも貧乏でないと云ふか、言ふなら吐せ。最う俺が恚う言出した以上は、たとへ其奴がそれでも貧乏でないと云ふか、言ふなら吐せ。最う俺が恚う言出した以上は、たとへ其奴が十百萬圓の先生でも、來權が見事に貧乏畫師にして見せるが、何うだい。……それでも貧乏畫師でないと、汝言へるなら言つて見る。」

「そら、そら、そら旦那、おつしやるがものはありまへんで。」

「貧乏畫師に相違あるまい。處でだ、番、今度は其奴の許へ汝が使者だ。」

「へい、私が。」

「山牛莠よ。」

「へい。」

「即ち、此の金子一封を持って行くのだ。貧乏畫師なら飛びつくだらう。」

「大金ですが、そら、そらくらひつきますが。」

あ、惜いなあ！ 何ないして此のお金子を

お遣はしなさりますか？」

「たゞ、遣るものか、畫を描かせる。」

「御尤様です。」

「其の繪に注文がある。」

「御尤様で」

「早合點をするな、よう聞いとれ。其の繪はな、

婦の足だい。」

「婦の足で」

と、藤子の閨の暗中で、其處等を探つた、昨夜の事を思出す。

「足を描かせる、足ばかりで可い。足ばかり、そら、恚うした處だ。」

とボンと揃へて、小男ゆゑ、脇息の下から、蠶の如くぴよんと兩足の踵を並べて、

「眞白な、綺麗な足だ。――要するに、あの

別嬪の足なんだい。」

「あの、あの 紅入友染がしつとりとし

て、ちら／＼と搦みました、あの」

「うゝ／＼うゝ／＼！」と唸りながら、

「あの徒には大金だが、俺には多寡が知れて居る。

旅先だ。繪具を用意しとるか何うかで、彩色までに

は及ばんわい。其の女の足を描いてな、二つ——

其の前べ野郎の頭を描かせるんだ、眞俯向けに、

——即ち叩頭をして居る、拜をなして居る處

だ。」

「はあ。」

「誰のだと思ふ、其の頭は。」

「はあ。」

「即ち、番だ。」

と脇息をゆすり笑で、

「汝なら、屹と願ふ處と思ふがい。」

「えへ。」

「いや、それにも及ばん。其の頭は、可いか、期

せずして、自から、繪を描いた當人、言ふまでもな

い、其の貧乏畫師の頭に成る——別嬪は金子を

取らん、彼女、意地だ。——男の足で踏んだも

のは髪へ挿せまいと　ー　俺が言つたのに對する
意地だ　こゝで簪を返すと成つては、別嬪
は尚ほ承知をしまい。承知せんわ。金子も請取らん
わと言つて、唯簪を貰つたでは來權の沽券に關はる。

處で先方の婦の足を、男が頭で頂いた　ー　其
の繪を添へて、更めて、簪なり、金子なりを持つて
行くのだ。　此ならば請取らう。が、耳に

栓をかつて聞け、番
の足を頂くなど、言ふ事はだ、罰が當つて聞く奴の
耳が潰れる。そりや、伽をさせる時は何處へ何うと
も話は別だ　ー

と人もなげに嘲笑つて、

「こゝが金子の威徳だわい。　繪で事
を濟ませれば、盲目が見ても、其の頭を來權のもの
とは思はん。描いた畫師の頭に見える、
其處が金子欲しさに註文通りの繪を描く奴の悲しさ
だ　ー　分つたか。」

「何でござりますか、其の

「分らんか。」

「いえ、成程、大きに

「分つたらう！ 使者に行け、罷立で、即刻行け。

首尾よく主命を果たしたら恩賞は請に依

るぞ。え、恩賞にばかりぺこ／＼と叩頭をしよる。

それ、此の一封を持つて行くんだ。退つ

て／＼、三尺退つて、六尺摺つて、廊下へ出るん

だ。」

「へい／＼。」

「待て、やい番！」

「待ちますか。」

「うんのろめ、用は分つたのか。」

「分りました。」

「何が、汝のやうなのみ込の悪い奴は、唯分つた

では踵へ抜ける。よく頭へ入るやうに、其處で鯨立

を一度しろ。ー 何、出来ない、何だ、足で雑

巾を掛ける奴が鯨立が出来ないか。しろ、しないか。

來權の仰に背くか、馬鹿、う／＼／う／＼。」

と呻くと齊しく、グワチャンと火箸を取つて投出

した。

「わ。」と言ふと鯨立。

「東！ 西！ 天の橋立とごさい。」

と諸國渡りものだけに、負惜を言つて、顔とおなじやうにしゃくれた紺足袋の裏を、倒にぬいと揃へたが、雲も水も欄干に輪に廻ると、

「や、姫沼様が鳥に化した。」

と仰天して、さかとんぼを打つて起きた

折から、梨影の湯の外磧を、水際に、はさみ褌し

て、藤子が藍色の浪打つて寄る、岸の細流を弄んだ。

白魚がかく假名に呼ばれて、すら／＼と三羽、三羽、

寄り来る鷺の、中にも眞白なのがちら／＼と膚、手

足に似て、袖は、翼の綾であつた。

まよはせ堂だう

—

「——此これは不思議ふしぎだ。」

菊山きくやま三吉きちは、座敷ざしきの眞中まんなかに腕うでぐみして立つて

と言いふより、恍惚うつつとりとしてイたんで、

「不思議ふしぎ。」

と獨ひとり四邊あたりを視みる。

十五でふ疊はばかりの廣間ひろまだが、寺てらゆゑ、此これは書院しょあんと言い

ふが相應ふさはしからう、此室こしつへ入はいる玄關げんくわんの正面しやうめんには、毘びし

首羯摩ゆかつまさく作さく、と肩書かたがきして、正面しやうめんに文字もんじを大おほきく、薬師やくし

如來にょらい。

今いま樣やうでこそあれ、藍あゐで彩いろどつた額がくの縁ふちへ、紅白こうはくの牡ぼた

丹んを堆うすたかく浮彫うきぼりにした面めんへ、二行ぎやうで金色こんじきに認しためてあつ

たから、誰たれが目めにも寺院じふんに紛まぎれあるまい。

其處そこで、菊山きくやまは案内まのいも言いはないで——尤もつとも取とり

次つぎらしいものゝ影かげはなかつたので——式臺しきだい口ぐちへ

ズツと通つて、襖際へ外套と帽を脱いで引束ねて置いたなり入つたのであるが。

まだ次の間のあるらしい構であるから、奥は知らない、其處に本堂があらうも計られぬ。けれどせ、見廻した處では、廂も低し、大分古びた俗の家の廣間に見える。

床の間が見事に大い。

大幅で、細字の石摺が對に三幅懸つて居る。

書院か、廣間の眞中に、色は少し褪せたけれど、疊の古さに際立つて、緋の毛氈が一枚敷いてあつた。

菊山は其の毛氈を前にして、

「不思議だ。」

と棒に立つて居るのである打。

が、何もは・じめから、帽子と外套を脱いだ畫伯を、心太のやうにいきなり此室へ突出した譯ではない。

菊山も、初手は床の間から兩方壁際を一順した。

其の三幅對の、左右の石摺が半ば隠れるまで、硝子張で五段組ぐらゐな棚を据ゑ、又おなじ棚が幾つも壁について並べてあつて、色紙、短珊、半折もの、中には其の半折ものを一杯に横に伸して雇いた、水墨の山水などがあつて、一つ一つに木札が立つて、其の當時都會に於て名の聞えた、文人、畫家、歌人、俳人の名が記してある

様子が、いづれも鹽原に遊んで、こゝに詣でた序に、ものずきな住持住職の需に應じたものらしい。

書畫は、大抵新しい

間に挟んで、鑄もの、木彫の類、古刀劍、また刀の鏢、矢の根石、錆びたる鎌、つゞいて獨鈷、身ばかりの大長刀、眞僞は知らず阿育王の塔と稱へるものなどをばらりと交へて、お土産雜、五月幟の鎧冑、いま出來の博多人形まで、陳列してある。

それに何の不思議があらう。

たゞ敷設けた其の緋の毛氈が、まざ／＼と其處に人、しかも美しい人のあるやうに見えたのである。

美しい人と言ふのは――然も其の人の足を以て湯に銘するのを拒むために、單に足ばかりのために、菊山が此の土地を探つたと言つても可い、亡き梨影女子、お梨影さんの筆に成つた一曲の屏風の美人畫が、ありのまゝに目に浮んだ、その面影なのであつた。

繪の姿は――高等に圓鬚を結つた瓜核顔の氣高いばかりの婦人と、腰元とも見えなければ、妹とは思はれない。圓顔に愛嬌づいた、一方が師匠で、もあれば、たとへば其の弟子とでも言つた様子の、年紀下の島田鬚に結つた小紋に桃の花片、薄色の飛模様の小袖を着たのと、いづれも羽織なしで、現代の風俗ながら、不思議に當世離れのしたのが二人、人ませもせず、町には素より、村里にも遠さうな丘の上の一處に、蒔繪の組重、吸筒を取開いて、錦葉を視める風情であつた。

花には小袖幕、錦葉には袖几帳一硝子張で五段組ぐらゐな棚を据ゑ、又おなじ棚歟、さし交した、龍田姫の機の柱のやうな樹の枝に、脱掛けた紋着の對の衣は、二人の繪の女の羽織らしい。が其の照葉に照映えて、繪の具の冴に薄萌葱、群青、紅など織交ぜた綾の裱襦に見えるまで、面長なのも圓顔なのも、臍丈けたものであつた。

一年、上野の展覽會で、琴の銀の糸を衝と張つたやうに、床しい名を、お梨影さんが世に響かした

其の年の秋の末

時節も丁ど今頃である。

お梨影さんの、一目見て何となく幽玄の趣のある、もみぢに美女の其の繪は、翌年の春、仏蘭西の某府に開かるべき、萬國博覽會に出品するためのものであつた。

菊山はことづてがあつて、お梨影さんを訪うて、

然も同じ人が、丁ど出来上つた繪に、落款をする處
を見たのであつた。

年は経つたが、菊山は忘れもしない

其の頃、お梨影さんは、右の一曲を描くために、
上野の奥、櫻木の森の中なる、或大寺の別棟の控家、
むかしの寺侍の邸と言つた家を、假の寓にして居た、
と言ふのは其の年の秋の洪水に、根岸邊
の本宅を洗はれたので、一家擧つて、同じ櫻木町へ
引越したのであつたが、あつらへたやうに引越先の
斜向うに、件の控邸が見着かつた。――（第一、
鹽原のいま此の座敷のつくりが、上野の彼處の書院
に似て居る、）それもそれだし

お梨影さんが仕事のための假住居は、豫て通知を
受けて居たので――餘儀ない人に頼まれて、き
やうだい弟子の許へ誂へた繪の催促に其の日出向い
た――菊山は、一度見舞に行つた本家の方へ訪
ねるに及ばず、直ぐに寺屋敷の式臺口へ樹立深く音
信れた。

秋日あきびより和さわやかの爽さわやかさ、本郷臺ほんがうだいから大學だいがくの裏門うらもんどほり通とほりを、散步さんぽかた／＼、ずつと歩あ行るいたから、然さまでも思おもはなかつたが、釣瓶つるべ落おしと言いふ程ほどで、不忍池しのばすのいけへ掛かる頃ころは、枯蓮かれはすの根ねに日ひが斜なめ、鳥からすの影かげも雁かりのやうに水みづに映うつつたのである。

お弟子でしらしい若い束髪そくはつのが取次とりついだ。

―― お嬢ぢやうさんは居ゐらつしやいますか　――

―― 誰方どなた様さま？　――

―― お嬢ぢやうさんに、菊山きくやまとお傳つたへ下ください　――

いまは隠居いんきよも同然どうぜんな、古手ふるてだが、お父とうさんが辨護べんご士しであるから、女史ぢよしながらも、訪とふものは、お嬢ぢやうさんと言いふのである。

柔ちやうかく、すら／＼と奥おくから衣摺きぬすれの音おとがすると、白しろい顔かほが、羽織はおりの模様もやうと一緒にしよ、ぽつと浮うく薄暗うすくい襖際はたけから、ぱつちりと優やさしく覗のぞいて、

―― まあ、　――

と一寸ちよつとはんのりして、

―― 何うぞ、まあ――
と顔を半ば、軽くうつむいて導くのに
續いて通つた。

其の廣書院の眞中に、開いた金屏風の一曲に、緋の毛氈が颯と流れて、錦葉に美女が描かれて居たのである。

菊山は傍の、まだ胡粉の皿をのせたまゝなる、嫁菜と撫子を染添へた唐津の火鉢の前に、膝を支きは支いたつけ

―― これは、お仕事の最中へ――

―― いゝえ――

と繪に背いて、そつと火鉢を押して、

―― 最う濟せました處でございますの。

押つけものなんですよ。あれ、可厭でございますわ、御覽なすつちやあ。

―― たしか

博覽會へお出しに成る分

ですね――

―― えゝ、何うも、些とも出来はしませんのに、父が何でもつて申しますものですから。それに、こんなにおくれましてね、最う今日中に出来ない、明後日とか横濱を outcome 出ます汽船に積まないで間に合はないと言ふんでございますわ。今朝つから、二度も、あの竹の臺の事務所から小使さんが見えるんですもの、最う何うしようかと思ひました。氣が急いて、氣が急いて

―― 確か審査は、一週間ばかりあとに濟みました筈ですね。あゝ、成程、貴女は審査なしだ。――

―― まあ、何うしませう。お情でございませよ。でなくつて、こんなものを、自分でも何が何だか分かりません、御覽なさいましな。

と其でも清しい目を遣つて、――庭のもみぢにも恥かしい。私の此の木葉つたら、何うでございませう、まるで紙細工。いくら西洋の人の目だつて、これぢやあ誤魔かせはいたしませんわ。――

世に言ふ、山水、花鳥の類は、無論其の得意とする處でない。お梨影さんは所謂美人畫の名手であった。

――でも、あの――

と一寸息を引いて、

――眺めて居るのが、おかめでございますから、丁ど可いかも知れませんかね――

否、凄いほど艶麗である。

菊山は染々言つた。

――弱りましたな、そんな事をお言ひなすつて

は御挨拶に困ります。しかし、そして、

お題は？――

――お題つて可厭でございますね、題と申しま

すほどでもございませぬけれど、あの、小説の中と
いたしましたの――

――はあ――

――あの、誰方のか小説の中に、こんな處がこ

ございましたから拵へて見ましたけれど　――

菊山は、ふと其の作家にねたみを感じた。

―― 眞個は桃の花を視めて居るんですのに、今
が秋でございますし、それに、何ですか、私此頃氣
が寂しくつて、心細くつて成りませんものですから、
寂しい山をお清書しました。でも

と一寸、息を引いて、

―― 御馳走ばかり澤山氣張つて　意地

汚でございますこと。　あれ、見ては可厭

でございます　――

と白い手で蔽隠すやうにした　ぢゆう組
の時繪の金が爪紅の裏透くばかり、唐草に添へた紋、
枝に掛けた袖の紋、齊しく菊山の家いへの紋の酸漿かたばみの其
を映したのである。

菊山は、はじめて、心着くとゝもに衝と伏せた瞳

に、火鉢の撫子と嫁菜の花が、色も淡く、可憐く、
優しいのに、繪の具の胡粉が露のやうに散るのを見
た。

目を外すと、大なる床の間に、黒い石摺の三幅對。

――御免なさいまし。一寸印をおす眞似をいた

しますから――

――何うぞ、お立派に――

――極りが悪うございますこと――

雪の頂を斜に見せて、客にかくすやうに、身を曲
つて片袖を敷いて、散敷いた錦葉の下へ
織枝とした落款に爪紅の鮮麗さ、ともに風さへ添ふ
ばかり、畫の動いて活きたのば、かきての結綿がは
ら／＼と、おくれ毛を誘つて揺れた、藤紫の鹿の子
であつた。

二十を越したが、其の島田がよく似合つた。

唯、もみぢに据ゑた、落款を熟と視て、

―― お笑草わらひぐさ 恚かうした處ところは、瀧たきの川かはのお
土産みやげですわね、西洋せいやうの醉拂ようつほらひさんがぶら下げませう

と菊山きくやまを視みて微笑ほゝそんで俯向うつむいた、百合ゆりのうてなの
重おもいやうな、唯ただうなだれた娘むすめながら、さすがに一家か
の意氣いきがある。

―― お芽出度めでたう！――

―― 御堪忍ごかにん――

と慇懃いんぎんな 雙方手さうほうてをつく。

處ところへ式臺しきだいで、

―― 頼たのむ、頼たのむ――

―― あ、あの人は、本家ほんけへ手傳てつたひに行いつたと見みえ
ます まだ一向片かうかたつ附つきませんで、晩方ばんがたは混こん
雑ぜつしますものですから。

成程なるほど、玄關げんくわんの次つぎの室へやから、茶ちやを一度運どはこんだ切きり、女をんな
の弟子でしは氣勢けはひもなかつた。

お梨影さんは、ずらりと縁側に立掛ると、軒を覗く
錦葉の影を、其のまゝ袖の色に宿しながら、唯肩
を細く伸上つて、

―― あゝ、小父さん、すぐに庭へ
其

の木戸が開きますから――

半纏の衲短に、脊の抜群に高い爺の、のそ／＼と
来たのは、菊山も知つた噂の小使。

―― 度々何うも濟みません
すぐにお

渡し申しますから。紙細工
瀧の川――

と金屏風をぴたりと伏せた。

―― まあ、貴方――

―― 御苦勞――

と菊山が逸早く引立たで、お手傳ひに吃驚したや
うに、膝をついたなり繪屏風の片端を、お梨影さん
が、ハツと壓へた。

小使め、布風呂敷を縁に大きく押開きながら、頤
を上げて、

ー ー いや、御兩人様 お揃ひで ー ー

ー ー 串戯言ふない ー ー

唯見ると、我は立ち、人は袖を敷いた。

まだ電燈も引かぬらしい寺邸の廣間の眞中に、其
のまゝ此の美女を据ゑたさうに、緋の毛氈が、ほん
のりと浮いて、黄昏の色に出て、簪からこぼれたや
うに、染めた葉がひら／＼と二三枚。

ー ー と思ふ菊山の、鹽原の (假に) 薬師寺
の、恰も其處へ ー ー

ぴら／＼と二三枚。

迷はせ堂の續

—

時に菊山は、別に、これを怪しいとも思はないで、
普通、自分が一度出合ったことのあるものやうに、偶と、山の奥に（迷はせ邸）と言傳ふる神秘的な家のある事を思ひ出した。

—— 恰もカーン／＼と冴えた鐵槌の音に交つて、
さあツと言ふ、地の底を潜る水の音が風のやうに聞えたが ——

たとへば、木の芽とり、柴刈などに心惚けて、いつの間にか、うか／＼と山深く分けて行く。

或は、はじめから路に踏迷つた例もあつて、まだ一度も見も知らぬ、行つた覚えもない處へ出ると、其處に思ひもかけない門構の家に出會ふ事がある。

奥山で。

此が所謂迷ひ邸である。

門内には、何の時も敷いたやうな紅白の綺麗な花が一面に咲いて居る。と此處へ誘はれたものは、其の花の美しさに心を取られて、ついうつかりと門を入ると言ふ。が、此の迷ひ邸に出會つたものに、嘗て其の門が鎖されて居た例はない。尤も門がしまつて居れば、誰も無斷で入込む譯はないのである。

但例として、一般に怪異の行はるゝ、黄昏や、夜陰の場合は殆どない。前條の一種の秘境は、必ず白晝の静寂の間に於て展かれる。

で、蹈込んだものは、一應、花につゞいた家の横手、或は裏口へ密と廻つて、内の様子を窺ふものださうである。こゝで何處ともなく、ケゝコツコー、遙に鶏の聲を聞く。或は牛部屋に牛三頭、馬小屋に馬一頭の形を、まざ／＼と見る事もある。

また何もなしに、裏は行抜けの山遠く、眞晝を濃くする、ほんのりと白い、霧霞を隔てゝ、高嶺の雪に、花桐の咲交つたかと思ふ一抹紫の横雲を仰ぐ事

もあると云ふ。

いづれにしても、家内は盡く寂然として、人の氣勢はしない。

其處で、つい覗き／＼式臺に上り込む。いつの間にか、茫と成つて、隔ての襖を開けると、四間五間颯とあけ放しに成つて居て、清らかに、いま拭掃除のあとらしく、毛ばかりの塵も見えぬ。

唯、客設けをするやうに、座敷、また次の間などに、幾組か膳椀が出て居る。黒塗の時もあるが、大抵は朱塗だと聞く。五人前、十人前の箱を並べて、其の中から、一ツ二ツ椀を出して、數の膳は積かさねて、別に一ツ二ツが据ゑたやうに並んでるのに、其の椀が乗つて居るのである。

別に、廣間の眞中に――
(丁ど、こゝに毛氈の展べられた處に當らう。)

――火鉢に、鐵瓶が掛つて、ジーと松風の音を

疊たゞみに浸しませて、すら／＼湯氣ゆげの立たつのが、其處そこに

丁ぢやんと見みえる

機をりがある。蓋ふたを切きつ

てある時ときと、ぴたりと撮つまみの据すわつた時ときとあつて、一方ばうは氣きが濃こく立たち、一方ばうは薄うすくて靡なびく事ことは言いふまでもあるまい。

其そのいづれもが、山路やまぢに蹈迷ふみまよつたものゝ目めに着つく時とき、ひたと音ねを留とめると齊ひとしく、ふつと湯氣ゆげを消けす。

朱しゆの椀わんだとすると、其それとゝもにコトリと動うごいて、
バタリと一つ蓋ふたが落おちる。べつたりと朱あかい紅べにを吐はく
やうだし、黒くろいのは、鐵漿おはくろつけた齒はを、耳みみまでアン
グリと開ひらいたやうに見みえる。

此これを見みる途端とたんに、立たちすくんだ足あしを雑ながるゝ如ごとく、
腰こしを宙ちゆうにして遁にげると言いふ。

處ところで、此この迷まよひ邸やしきに誘さそはれたものが、もし其その、
寂さびしい、静しづかな、或あるひは鐵瓶てつびんの一具ひとつを持つて歸かへれば、其そ
の身みに圓滿えんまんの福ふくが授さづかる。即すなはち、黄金こがね柵ます、

玉たまの唐臼からうす、湧わきで出る米こめ、千反たんの卷絹まきぎぬを具足ぐそくする。

從したがつて、色いろも、戀こひも、思おもひを遂とぐることに、宛さな
然がら瑠璃るりを透とほして、物ものを見るやうだ、と傳つたへて、た
めに迷まよひ邸やしきを山やまの龍宮りゅうぐうと稱となへるのである。

雖けれども然けれど、むかしよりして、村里むらさとの人ひと、また、旅商たびあきんど人ひと、
諸國しよこく遍歷へんれきの藥賣くすりうりなどの、迷まよひ邸やしきに出會であふものは、折々せり／＼
あるが、福ふくを身みにしめたものは稀有けうたうだと傳つたへる。

大抵たいていは、椀わん、家具かぐ、鐵瓶てつびんを手てに握つかんで退しりぞくべき約やく
束そくを、豫かねて言傳いひつたへには聞知きゝしつて居ゐても、いざと成な
と、氣きも心こゝろも空洞うつつろに成なつて、惚ぼけて忘わすれるのが十中ちゅう
の九こまでださうだ。

もし、身みも心こゝろも遅たぐましく、家具かぐの一つに手てを懸かけよ
うとするか。鐵瓶てつびんは、八やたと音ねを留とめ

て湯氣を消す　――　椀は鐵漿の齒を開く、眞赤な舌を吐く。瞬間の怪異に魂を消すのである。

尚心豪に、氣の健なものがあるでしょう。

爰に不思議なのは、鼠一ついきたものゝ、氣もない家の内に、何か知ら、何處ともなしに

と言ふ中にも、一間へだてた廊下を通つて、廊下の突當り　また右もすると、壁があつて、

壁の片隅など、一軒に必ずあるべき厠の、厠のありさうな處に、いつの場合でも、何となく人が居てゐむらしい様子のある事である。

之は只聞いても、可厭に凄いが。

男だと青い顔して、兩手を懐にしつゝ、悄乎と立つて、此方を睨む　――　婦だと、袖で片頬をかくしながら、眞白な面でニタリと笑ふ　ト爾く何となく氣に感ずる。

此處だ。

いかに、戸締の嚴重な家でも、眞夜中、例の丑満
と言ふ頃、家の周囲を戸外からぐるりと廻ると、一
度はない、二度までなくとも、三たびめには、屹と、
スツと身を細くして人の入るだけの隙間がある。

其の隙間のある處は必ず厠の傍だと言ふ。

將に狂せんとするものが、はじめて、言語なり、
舉動なり、常規を逸した行爲をするのは、大方は厠
の内外だと聞く。激しいヒステリーにかゝる婦人の、
泣くも、笑ふも、齊しく同じ處だ、と言つて、あゝ、
あの嫁は、内室は、厠で泣いたわ、笑つたわ、やれ、
もう危い、かなはぬぞ、と故老の輩は沙汰をする。

或種の魔が居て、其處に潛むのであらう。

につけても、迷ひ邸の厠の傍に、何とな
く人の居る影のさすと言ふは不氣味である。

とー 菊山は一人、人氣のない、石壇の上な
る藥師堂の廣間の眞中に、置捨てた金箔のやうに、

ふはりと敷いて、然も一筋の皺も見えぬ、あの、お
梨影さんが、筆の冴で金屏風に描いたやうな、緋の
毛氈に對して、もみぢは散れど、秋空映る玲瓏たる
眞日中だと言ふのに、櫻木町の森の中なる、寺邸
の黄昏を、――いま目の前、目に泛べた。

けゝこつこう ー

鶏が鳴く。

谿河の響も留みつ。

「おゝ」

膳、椀、それは知らないけれども、

「はてな。」

次の間と思ふ處に、然も間の眞中に、

ちゝゝゝと湯の沸る音がして、湯氣のすつと立つ
ゾツとする ー 氣勢がした。

同時に、次の間に、何となく人の居るやうな気が
し出した。

隔は二枚の古襖で、其が閉つて、――あとは、
大な床の間から押廻して、曲尺形に、書畫、佛像、
骨董類の件の陳列架に成つて居る。

が、其の襖を開くと、開いた處に座敷があつて、
確に其處に誰かゞ居さうなのである。

いま、迷ひ邸――山の龍宮を思ふ幻影は、鐵
瓶と其の湯氣の場面で、膳椀の取出されたと言ふ趣
には描かれなかつた。で、彼方に居る人氣勢は、何
となく婦である。

且つ、其も、朱塗の舌を吐いたり、黒椀の齒を剥
いたり、青い袖で片面をかくし眞白な圓い顔でニタ
リとするやうなものではなく、何うやら、それが、
寺邸に於ける、あの時のお梨影さんのやうである。

然うかと思へば、目の前の毛氈に對すると、金屏風を抜出した繪の婦の姿のやうでもある。雖然、それだと二人である。

「第一、小使が、風呂敷に包んで持つて行つて了つた。」

とつきもない事を考へたが。

矢張り、

其處に居るのはお梨影さん一人らしい。

「こゝに、向合つて坐つて

金屏風を横

に置いて

とうつかり菊山は坐らうとした。が、唯見ると、緋の毛氈の上へ、片膝でも懸るが否や、スツと攫はれて、我が手も、顔も、筆で描いた線に成つて、衣ものゝ色其のまゝの繪に成りさうな思ひがした。

四邊はそれだけ寂然として居る。

けゝこつこつ ー ー

又鶏が鳴く。

「ほう。」

菊山は膝一つ支きもせず、矢張毛氈の前に立つて居た。

が鐵瓶の湯の沸るのが、白くすら／＼と、明かに襖越に目に映る。

愈々誰か居さうである。

今度は、妙に、廣い縁側か、廊下があつて、迷ひ邸の、こんな場合につきものゝ、廁が其のあたりにありさうに成つた。

またしても不思議な事は、床の間の様子から、此の出入口、襖の工合が、櫻木町の森に、そつくりである。

其の寺邸の、あの時は――

「然うだ。」

歸りがけに、

――あゝ、失禮ですが、はゞかりを何うぞ――と私が言ふと、

――はあ、何うぞ　でも、お氣味が悪

うございますよ　――

とお梨影さんが、（それが、此處と同じやうな）
襖開けておくんなすつた。樹立の中だし、暮合だ
し、中庭らしいのから夜の影が溢れて、縁側との劃
もつかず、薄暗し。青くほの見える手水鉢も、廂か
ら蔽ひかゝる南天で、坊主の影が法衣の袖で抱いて
居るやうに見えた。

―― あゝ、分りました／＼。 何うぞ

お構ひなく ー
と見當をつけて、眞直ぐにつか／＼と縁を行くと、
導いたお梨影さんが、

―― は ー

と肩を引いて、なよやかな帯腰を斜に、縁側につ
いた座敷へ身を躲すやうに入つた。が、其處に、火
鉢が見えて、鐵瓶が掛つて居た。

（湯氣は？

いま、氣がつかない。）

琴をたてかけたかと思ふ、姿見があつて目につい
た。

さら／＼と其の蔽を取つた、裏絹の、這つてすれ
る音を聞きつゝ、ギイと此方は戸を開けて厠の時、
座敷から、床しい白粉の香が芬と流れた。

―― 此は！ 貴女の手から ー

お梨影さんが、柄杓を取つて、棲深く、然も柔か
に膝をついて居たのであつた。

―― 私なんぞに ー

―― まあ ー

とこゞみかゝる目に、ほんのりと、肌理のこまか
さを鬢とゝもに、そむけて、しなやかに、ほの白く
映しながら、

―― 私では、お氣味が悪うございませう。 ー
と言ふ時、またほつと瞼は白く浮いて、聲は優し
く籠つたが、唇は蒼が綻びるやうな顔が見向いた。

―― お梨影さん、罰が當ります ー

と碎けて言つた。が、もう倒れかゝりさうだつた
腰を極めて、しゃんとして掛手拭を、確と取つた。

―― 何うぞ、これで――

手が一つ、袖が二つ、重つた、ちらりと友染にか
らんだ手首は、折つて持った別なる手拭より白かつ
た。

―― 結構です――

其のまゝ、掛手拭で清めたが、此の方を或は遠慮
すべきであつたかも知れない。我が手に、白粉の香
の更に媚かしく芬と薫つた。

羽織の襟に、肩がすれる

お梨影さんが

立たうとして、足も弱さうに、ためらつた時である。

寂しく、廣い、そして、暗い、白粉の香の且つ漾
へる、寺邸に、爾時は世に唯二人であつた。

―― お寂しいでせうなあ――

―― は、 菊山さん――

トタンに身を開いた。

雲から落ちるや

うに離れつゝ縁を、もとへ戻る時

―― あの、御緩り ――

あゝ、其の姿がいま襖一重

幻影に ――

菊山の目はまた暗く成つた。

此處にも理由がある。

與八番頭が、萌葱の紐をしめ直して齎した、婦人の足を掛けと言ふ
來權の水引包を、刎返した事は、別に、更めて説明に及ぶまい。

菊山は此日、門前の妙雲寺、七曲の瀑、精進川、逆杉、八幡宮、時があれば木の葉石まで、會津 ――
へ通ふ二十里の漠々たる雲の端に、星に象ある如く列つた、古湯道の右左なる、古跡名所を訪ねようと思つて、秋絃館の宿泊を出た。

見るものゝはじめは、道の順として、其の門前の妙雲寺で、其の寺にこそ、まこと毘首羯摩の作と言ふ、三國傳來、梅檀香木の釈尊の像がある。

其處を志して、織機の宿を先づ出たのである。が、
出ると、前途に見える（丁ど其の見當に當る）
日を蒼空に、月を雲にした、二枚の繪馬と、一束の
御幣の立つた、庚申塚の前に、髪黒く、撫肩ですら
りとした婦人が一人 些と遠目ではあるが、
後姿で、其が、お梨影さんにそつ、くりの姿を視た。

はつと、旅宿の看板の下に、立停つて見るうちに、
あたりの落葉、木の葉唯一枚で塞いだと思ふ、むか
うの細道を、婦の其の姿は、見返りもしないで、す
つと入つて隠れ行く

追継りはしなかつたが、まだ何程の間もない、と
思ふのに、庚申塚へ行くと、早や、どこにも其の姿
は見えぬ。

尤も、道は庚申塚から檜漆の、あかるい道、爪先
上りの唯一方である。

見透しても、何も無い。其の姿を慕ひながら、坂
をかさ／＼と音立て、上ると、一方は崖で、一方畠
なる、畠に添つて、小屋萱家が一二軒、軒とも、廂

ともつかず、破れた羽目に自轉車の壞れたの、白な
どが目に着いたばかり
言ふまでもなく、
其の似た人が、こゝらへ入らうわけはない。

やがて、崖の下に、颯と水が走つて、桂なす橋が
目の下に見える、――裸身の小娘の浴するのを、
來權が見て、酒呑童子の蝋燭だと言つた谿である。

右の一方は小屋はづれに、路傍に石碑が二基、二
十三夜堂、一基に湯神祠と刻んだのが建つて居て、
眞中が、石碑とゝもに、苔蒸して、且つ崩れたが、
蛭りつゝ高い石壇であつた。

月出でなば、目に残つて、上から覗きさうな森が
見える。

湯神祠と言ふ。

我も人も、温泉の恵を享くる身の、もしやと思ふ
念もあり、且は、湯神に詣づるため、菊山は、凄
まで谿河を深く底に見つゝ、一人洋杖をついて壇を
攀ぢた。

其の二 蜷りする處に、草がなだらかに展けた所に、
薬師如來。

こゝにもありや、毘首羯摩作。而して、「紅」
「白」のニと咲いた、牡丹の額を見たのであつ
た。

既すでに言いつた。開ひらいた門もん、空むなしき式しき臺たい、守まもらぬ庭には、人ひとなき座ざ敷しきは

緋ひの毛まう氈せん。金きん屏びやう風ふう。美び人じんの繪ゑ。

鐵てつ瓶びん、湯ゆ氣げ。

襖ふすま、次つぎの室へや。

廊下らうじか、廁かはや。

人ひと氣け勢はひ。

其その人ひと氣け勢はひのお梨り影えさん。

我われを忘わすれて、襖ふすまに寄よると、其その寄よる足あしに、氣き構まへへ
たか、居ゐずまひを直なほす身み動じろぎに、袖そでも友いっ染ぜんもちらり
と動うごく。ト手てに取とるばかり。

襖ふすまの色いろも、小袖幕こそでまく。トタンに美うつくしき人ひと、怪あやしき神かみの籠こもれる如ごとく、冷つめたく颯さつと胸むねを切きらるゝ思おもひして、あとしぎりをする氣きながら、吞のまるゝやうに襖ふすまを閃ひらくと、

「あ、菊山きくやまさん、」

「先生せんせい。」

と明あかるい聲こゑ。

縁えんをうしろに、座敷ざしきに居あて、端坐たんざしながら、ト見み迎かへた、麗あでなる美た女をやめ。

姿すがたも、面影おもかげも、お梨影りえに似にた、それは姫池ひめいけ藤子ふぢこである。

幻影まぼろしではない。正しく視て消えないか

ら。しかし、菊山きくやまには其それが一層そういぶかしい。

庚申塚かうしんづかの、日月じつげつの繪馬えまの下したなる姿すがたを視て、似にたと
思おもつて、一つは其それがために、此堂このだうへ引寄ひきよせられた婦んじ
人んは、偶ふと顔かほを合あはせたが、やゝ細面ほそおもてで矢張りやっば似にて居
る。似にて居ゐて、然しかも怪あやしさを包つむ霧きり一重への隔へだてあるの
でなく、衣類きものの色いろもすつきりと水際みづぎは立つたのに、い
ま名なを呼よばれた。——呼吸いきを、引ひく隙ひまもあらせず、
「先生せんせい」と又また聲こゑを掛かけられたのである。

驚おどろいて、聲こゑをも立たてさうな處ところを、渠かれは却かへつて落着おちつ
いた。櫻木町さくぎぢやうかたそがれの廊下らうかのやうに、其處そこにま
ざ／＼とお梨影りえさんが居ゐるのだと思おもつたから。

勿論もちろん、世よを去さて年としを經へる人ひとである。が、其そ
の倅おもかけ、其その姿すがたであるなら、何なんとされようと厭いやな氣きは
更たじらない。

と思ふのも、視るのも轉瞬の間で、齊しく目に着いたのは、其の婦人が端然として、しかし容子に硬さはなく、すんなりと心持膝を長く坐つた前に、ばつと赤い、毛氈が又こゝにも敷かれた事である。

其の上に、瀬戸物の火鉢が据つて鐵瓶が掛つた。氣勢の通りである。湯氣がスーツと立つ。

あゝ、魑魅、魍魎、幻怪の類が顯す、湯茶は、魅せられたものが取つて飲まうとすると、其のまゝ茶臺、茶碗ぐるみ疊の引合せの間隙からスツと引いて消えると聞く。

見よ、其の疊の引合せに、ものがある。天目茶碗を、朱塗の臺に、おなじ蓋をした茶具が一組、それを婦人の膝に押向けてある。少し下つた疊の縁に、べたりと手のさきを揃へてついて、めり込みさうに額をつけた、頭に黒の折頭巾を被つたのが、魚の腮のやうに、ふた／＼と動く。袈裟はなしに墨染の法衣を着た、其の低頭平身した體の、腰が消えさうに、へた／＼とした出家が一人居る。

茶に褐色の汚浸のある、別な頭を、ぐなりと柔か
さうな頸窪と共に、件の出家につき並べて、同じく
叩頭をして居るのは、鼠の布子に薄汚れた白の肌着
を重ねた、――此は幅狭だが、ぐるりと腰へ巻
いた茶縹子の抱帯ですぐ分る――尼である。

尼である、と言へば其までぞ。

婀娜に

艶なる――藤子――の前へ、てんもくを差
出し状に、頭巾着た坊主と、素頭の尼が、頭を並
べて叩頭をして居る――とだけの事だが、額
も見せず、眞うつむけに成つて、べた／＼と黒と鼠
で平伏した状が、如何とも、異形で、

變で、可厭らしい。

諺に謂ふ處の、大岩魚、古鰻が化けたのなら、稗
飯の残飯か、栗團子を振舞へば仔細ない。

が、何うやら湯治場の山海嘯か、大地震の前兆に、
鯨と、――鯨と、それ／＼山椒魚が、世棄人に
成つて這出した様子がある。

寂寞せきばくとして、ひく／＼と、然もしか、頭巾づきんの耳みみ、抱帶かへあひの背筋せすぢが喘ぐあへ。

湯ゆは頻しきに沸たぎる。

驚破すは、てんもくが口くちを

開あけはしないであらうか。

「先生せんせい。」

「あ。」

と引込まれたやうに、思おもはず答こたへた。

三吉きちは、敷居しきみを小跨こまたぎに、半身はんしんを突入つきいれたなり、片腕かたうでを斜なぐめに張はつて、胸むねを引ひいて身構みがまへて居ゐたのに心こゝ着ちいて、忽たちまち容かたちを穩あだやかに直なほしたが、更あらためて、變へんげ化げに對たいして、われを呼よんだ婦人ふじんを庇かばふやうに、つか／＼と縁えんへ入はひつた。

同時に、婦人が立構への片膝を浮かした。急な身動きに、媚かしく一寸崩るゝ褻を、片手づきに調子を取つて、きりゝとして、

「失禮いたします」と言つた。

言つたのは、庵主だか、堂守だか、其の二人に兼ねたのであつた。けれども雙方とも不氣味に平伏をしたまゝで、さて動かない。

「では、失禮。」

「あゝ、もうし。」

と、其まで洞穴の悪氣をしたゝか吸込んでゝも居たらしい、以ての外野太い聲を掛けて、爾時頭を擡げたのは尼の方で。――額と頤の寸の詰つた、妙に横幅の廣い頬のだぶりとしたのが、黄色い齒で、冷したやうにニコリとして、

「そんな事仰せられませんか、たゞ、ほんの一寸一筆ぢや。御参詣の御記念までにな。」

と思つたより年紀も少い、五十餘りで、てきぱき
とものを言ふ。

「一寸にも、一筆にも、不調法なんですから。前
刻からも申します通り、何も出来ないんでございま
すから。」

様子は七分通りのみ込めた。――成程、此の堂
には、切つて嵌めたやうな飾着けに成つては居るが、
此處の毛氈の上には、色紙、短冊、畫帖、唐紙が、
模様の如く備つて、てんもくに添へて、婦人が突つ
けられて居るのは一枚の色紙であつた。

「其でありますからな。」
と、しゃやるやうに、頬邊を振つて衣紋を抜いて、

「よく／＼お氣が進ませぬ事でありましたら、
唯もう、お名前だけ、お名前だけをな、な、貴女様
―― はい、そのくらゐな事ならば、お聞きずみ
下されましても可からうやうに存じられまするな、

はい。」

と又衣紋を抜いた。

「生意氣に、」

と藤子は激したやうに、ト息を切つて、

「名だつて、生意氣に、色紙や短珊に書いては不可いんですつて、不可いんですつてさ。」

「誰がな、貴女様がお筆を、貴女様で御揮毫なされますに、誰が沙汰をしますかな、な、貴女様。」

「先生です、私の先生です。」

「何處のな、どんな先生でありますな。」

「此處に 居らつしやる先生ですよ。」

え、そんな、そんな御揮毫なんのつて、生意氣な事をしては不可いつて、ちやんと影身に添つ下さるんですよ。」

影身に添ふ

三吉は場所が場所だし、折

からだし、覺えず悚然として、肩のあたり、胸を視た。――其處の三人は然もなうて、自分の身體が朦朧として霧に紛れはしないかと、且つ爪立つて

足踏をしたかつたほどである。

「ね、先生、ねえ。」

と、膝を立て、すつと中腰に、目がものを言つて、三吉の袂の端を、凝と取つて、伸上るやうにして、

「然うでございますわね。まあ、ほんの其こそ初心なお稽古中のものが、色紙短冊に描くなんぞ、飛んでもない心得違ひでございますわね、先生。」

と血の澄んだ凜とした顔で、密と袂を曳動かす、と内證で其の袂を引返して、着た衣ものに正體のあるのが、我とたよりに成るまでに、三吉は■として、相手の顔を視た。

「叱つて、頂戴よ、何うぞ叱つて、」

と、忽ちぽつと臉染めて、急に、然も甘えるやうに言つた風情は、霜の梢を落ちながら、袖にとまつた紅の木の葉に似て 血は通はねど、男の胸にほんのりと暖い。

三吉は目を覺したやうに成つて、

「叱る、と言つて？」

「化ものを？」

「いゝえ。」

と、美しく鼻筋の通つた顔を横に振つて、

「私を――私を厳しく叱つて頂戴。」

生意氣な眞似をしちやあ不可いつて。」

「解りました」

「解つた。」

唯此の間、坊主の方は突伏したまゝである、尼は黒切で、フン／＼フンと又鼻をかんだ。

「師匠が堅く申聞けます――生意

氣な眞似をしては不可い。」

「お分りに成つたでせう――お堂守さん、御

庵主さん。」

「では、失禮。」

むず／＼と、坊主が肩で動き出した。

「然、然ういたしますると、先生様は誰方様で？」

「御尊名。」

と平伏したなり粘つて引張る。
藤子が爽に、
「菊山先生。」

三

「千溪」せんはは
様で。」

と、ひよいと上げた、
其の坊主の顔より、
三吉は

狸たぬきに呼よばれたやうに、又また吃驚びつくりした。

誰たれかに似にて居ある　　目めの狡さかしい、色いろの黒くろいの
が、頬ほから頤あこへ、一皮かは剥はいだやうに髯ひげをそりたてど、
べろりとして居あた。

トタンに又また突つ伏ぶして、

「はッ、願ねがうても僥倖さいはひ、ようこそ御光ごくわうらい來き。後光ごくわうが
さします。恰あたかも早はや貧寺ひんじへ御來迎ごらいがうのやうに存上ぞんじあげま
するで、はッ。」

三吉きちは又また悚すくんだ。

「平ひらに、更あらためて先生せんせいに願上ねがひあげまする、ほんのおし
るしばかり御揮毫ごきがうあろ下さしおかれまするやうに、はッ。」

「私わたしにお叱言こっせをおつしやつた、すぐあとで、先生せんせい
がそんな事ことをなさいますもんですか。」

と、世話せわな天人てんにんの手拭てぬぐひのやうに、膝ひざに捲落まきおとして居
た金紗きんしゃの肩掛かたかけを引手ひつたく繰くつたと思おもふと、三吉きちに引添ひきそつ
てスツと立たつ　　留南奇とめきちの薰かをりがはらりと散ちつ

て、

「然やうなら　――　さ、先生、参りませう、貴方。」

で、何だか反對に、此の婦人に扶けられて、危地を脱してもするやうな心持で、遁げるが如く、衝と並んで出た。が、もとの廣室の眞中を斜に突切る時、ふん／＼ふん、と又しても噴んだ、おぴたゞしい比丘尼の鼻息が響くと、婦人がすら／＼と捌く襖を、ハツと躓いたやうに、足袋の爪尖を折つたのが見える、浮足で。

心急ぐ、　――　急かねば成らない。

美女に對しては、此奴、見苦しいと思つたほどだが、是非がない。折躓ふやうな形で、式臺に束ねた帽子と外套を引抱へた

其の機掛に、――

「あゝ、何うも

――

藤子が、こぞみ掛つて、菊山の下駄を揃へた。剩
へ袖口を一寸脚へて、土に伸した雪の小腕。

「何うも、此は。」

「さ、貴方。」

と急くのが響いて、婦人の駒下駄がカタ／＼と鳴
つた。

「不作法なやあ！」

と尼の聲が押被さつて、

「挨拶もしさらいで。」

「何處ぢやと思ふ。」

と坊主の聲。

「罰當り」

と同音に喚いた。

「あ、あんな事を。」

其の挨拶も、會釋もしなかつたのは菊山の方であ
る。

「構ひませんわ。早く、さ。」

と、もとの磴を揃つて下りた。が、目の下の徑を、

尚崖なほがけの底そこに翻ひるがへる、青い流あをながれに落込おちこむばかり、高い處たかところを
すた／＼と、婦人ふじんの裓つまは揺ゆらいだのである。

勢いきほひで、突當つきあたりさうな草枯くさがれの乾かわいた土手どてへ、菊山きくやまが、
ドウと成なつて腰こしを落おとした。

爾時そのとき、いつの間まにか手てを引合ひきあつて居あたが、ツ、
と下おりたはずみで、取とつたまゝ、左さ右うに分わかれて、一
つ振ふつて、ハツと輕かるく離はなす　　と、離はなした
時とき、兩方りやうほうで莞爾にっこりした。

「何なんだい、あれは。」

堂だうを睨にらんで、無遠慮ぶえんりょに獨言ひとりごとを言いつた。が、湯神祠ゆのかみほこら
と、二十三夜講やかうと、雙さうの碑ひは、青苔あをこけのまゝ、水みづの裡なか
のやうに、薄うすい日南ひなたに寂寞ひっそりして、磴いしだんには赤蜻蛉あかとんぼが二
つ三つ　　敢あえて火ひの玉たまに成なつて追おつて來くる土蜘蛛つちぐ
蛛もの形かたちも見みえない。

「何なんの化ばけものなんでせうな。」

四

婦人は、ほんのり上氣して、息せはしい口元を、肩掛の端で包んで居た。

「先生、あの、私も、其の夥間のやうに見えまして、
たでせう。」

「夥間とお言ひなさいますは？」

先生にも、貴方にも、第一何うして自分を知つて居るのかさへ、渠は知らないのに、こゝで其を訊く隙もなかつた。――夥間と言ふ

唯、少し俯向いて。

「えゝ、其の化ものゝ。」

「御串戯を。」

「いゝえ、あんな妙な處に居て、變な女が、失禮な、唐突に先生のお名をお呼び申したんでございませもの。それは、あの、正しいお目には、怪しいものは影法師だつてお邪魔はいたしはしますまいけれども。お化の方からはお見上げ申して、先生のお姿

は、密と存じて居りましたよ。

「はあ、何方で。」

「ま、ですから、先生のお目には怪しい影は入りませんと申しますんです。――實は、お宿の、同じ、あの秋紘館に参つて居ります。尤も天井の裏ですけれど。」

「飛んだ事を――しかし、あゝ、然やうですか。」

と心易く、軽く禮して、

「心着きませんで、失禮しました。」

「まあ何うしたら可うございませう。私こそ、でも弱りましたんですもの。最う何うしようかと思ひました。」

「一體何うなすつたんです。」

「えゝ、其處等を、些と歩行いて見ませうと思つて、宿を出たんでございます。」

「一寸失禮ですが、何時頃。」

「つい前刻でございますよ。」

「附かん事を伺ひますが、此方まで來らつしやりがけに、彼處の――あゝ、此處からは一寸木の葉に隠れて見えませんが、彼處の庚申塚をお通りには成りませんか。」

「はあ、一寸拜んで通りました。」

と向へ後向きに成つた、撫肩の、すらりとした處は又肖如である。唯、心持背は高からう。

衣ものは、二枚かさねて下着は知れない。上はつい通りの黒の勝つた小濱の縞だが、優しく色の冴えた浅葱の麻の葉の丸帯が、すつきりとして、然も艶によく映る。紺地の金紗に、薄藍の條にちら／＼と紅の線の搦んだのが、透かすと見えるほどに入つた羽織で、いま、後むきに成つたので、心置きなくよく視ると、裾に葱の葉が、いき／＼と露を含んで青く染まつた

これは、
何處かで見たやうな、お梨影さんが、しかも着て居たのを、と思ふほどで、し

つとり着こなして、谿河の水も響かず、ゆらぎもしないのに、露が、其の葱の露が、ヒヤ／＼と身に沁みた。

「何故でございます。」

と向直つた、帯の淺葱の麻の葉も、露を誘つて水際立つ。

五

「何、別に――唯一寸お姿をお見掛け申したやうに思ひます。勿論、お後姿だけでしたよ。」

「もう、あの、其の頃から化けて居ましたでせう

「知ら。」

菊山は、唯したしく微笑んだ。

「まあ、何うしませうねえ。」

「いや、そんなに、御自分で意地に成つて、お化、お化とお言ひなさるなら、實は申上げたい事があります。貴女、失禮ながら何とおつしやいます。」

「名ですか。」

「お差支へなくば。」

「あの、藤でございます。――蔓ばかり葉ばかり

と、はなすと、すらりと肩掛の端が、憎らしく其の藤紫の背負上の色を包んだ。

「あゝ、綺麗な、床しいお名だ。」

と抱へたまゝだつた外套を、草に預けて、

「藤子さん。――私は實は、貴女が、眞個のお化だつたらと思ひます。必ず、堅く何うか

氣になすつては不可ません。が――それにしても、今の堂は變ですな。不思議なほ

ど、私は貴女に似た人を知つて居るんです。」

と、意氣込んだ言が、偶と途絶えたほど、今更に
相手の氣を憂慮つて、顔の色も變りはしないかと思

へば。

何の。

莞爾して、可懐しさうに顔を見て、

「當てて見ませうか。」

「え。」

「似た方を。」

「貴女が。」

「はあ、お化效に」

「いや全く。」

「全く」

山奥には木精と言ふものが住ん

で居りましてね。よく人様の思つて居らつしやる心
の通りを當てるんでございます。――一寸
お禁厭をいたしますから。」

懐紙のまゝ、懐かゞみをすつと抜くと、紫の蔽を

左右へ、白い掌へ、ツと開けて、肩で斜に成つて、映した鬢に手を翳した。

「ちゝんぷいぷい。」
と綻びさうな唇

で、

「眞個は、結綿島田か、圓鬘でないと、木精の通力が足りないんですけど、一生懸命
ちゝんぷい、ぷい。―― さあ、當てませう。」

とずつと寄つて、低く居て、腰掛けた三吉の胸に、しろ／＼と近く項を視せた。

唯、つくし、茅花を選ぶやうに、毛筋立、小櫛を分ければ、心ゆくばかり膚が薫つた、藤子は白粉紙を手にしたのである。

ちら／＼と細く揺つて、指で刻んで、かゞみの上に翳したが、

「先生、お分りに成つたでせう、―― 此の人の事でせう。」

三吉は、こゞみ掛ると、額の富士に鼻を打つ眉の
近さに、間の膝頭へ隔てに組んで差置いた手を、此
に於て、忘るゝばかり、茫然として唯凝視めた。

「御覽なさいまし、白いのが、ちら／＼ちら／＼、
あゝ、此ぢや ト筮でなくつて、まるで手
品でございますわね ー ー まあ、お轉婆ですこと、
私 ー ー こんなんぢやあ不可い。 あゝ、
お待ちなさいましょ。」

と碧く澄んだ山際に、すら／＼と白い薄雲。

肩にかざした懐かゞみに、遙に影を呼迎へた、藤
子は瞳も恍惚と、

「優しい、甘い、少しさみしい、品のいゝ、白い
梨の影が見えませう。
・先

生。

「 ー ー 貴女は。」
「今日は記念を着て居ます、帯も、羽織も。」

と指環に掛けた羽織の其の裾、葱にかゝるは眞珠
でなかつた。

藤子は聲もしんみりと、

「あゝ、此の葱も、私が着ては、浮草に見えませ
うーお梨影さんは、眞實の、私の姉でござい
ますよ。」

薄雲のつゞき

—

きつぱりと、いま然う言つた藤子が、一寸瞳を外

して、

「御免なさい。」

と言った。

「三吉は、咄嗟には口も利けなかつたのである。」

「済みませんわね、あの、ひとがらでした姉の、妹がこんなぢやあ、梨影さんの御鼻負の貴方に對して。」

と向直つて莞爾。言の中に、其の姉の人品を顯すやうに、懷中かゞみを抱きながら袂を曳いて、袖を合せて、肩で、柔かな嬌態をした。が、嬌態とは見えず、峰も、谿も、肅殺たる秋である、風が、其の袖袂を吹撓はせたやうに見えて、縞の線の紅も淺葱も陽に白い。

また、黒髪の艶の影。

亡き人の面影が、すつと浮いて、イ身に添つた風情である。

一霜浴びたやうに、悚然とした三吉は、外套を取
つて、犇と胸に當てながら、

「御令妹——」

と、胸は騒ぐのに、故と餘裕のあるらしいことを
言つて、

「ぼつ／＼其處等へ參つて見ませうか。」

「は、然ういたしませうね。」

と次手に鬢を軽く搔いた櫛とゝもに、其の小かゞ
みを帶の間へ。

「でも、恐入りますこと

ぢやんと梨影さん

の妹と、御承知を下すつて、尤もお化の堂の礎下だ
けでせうけれど。」

「いや、よく解りました。」

と靜に立つた。

「道理こそと思ひます

お梨影さんのお

葬式の時でした。谷中で式がありました

「えゝ。」

「天台宗で居らつしやいますな。」

「私は勘當娘ですから、實家のお宗旨もよくは知

らないんです。――お察し下さいましな。」
と顔も、薄雲にふと陰翳つたが、
「まあ、そんな事は別にしまして、あの、お宗旨
は然うなんださうですよ。」

「だらしもなく、徒に生きて居ます、冥加には、
時々世の中に大切な人の葬禮にも立合ひますが、お
梨影さんの時の坊さんくらゐ、揃つて、静肅な、殊
勝な、然して尊嚴なのは見ませんでした。出家たち
の心掛がよかつたのか、美しい佛の氣をうけたのか
分りません。――肩こすりをする、頸窪を振廻す、
立つと、足を擧げて、蹠で膝小僧を引掻くのなんぞ
ありますから。――其が唯寂然として經の聲ばかり
聞えました。あの時は

私は
私ながら、少し氣取るんぢやあな
いかと思ふほど、袴に手をついて俯向いて居ました。

南無、と導師の老僧の聲が、一際澄んで聞えて、
ふと顔を上げますとね、お焼香の煙に霞んで、雪の
やうな姿が見えます。向うむきこ成つて、恚う、白

い手を眉の處へ

。

白無垢、白羽二重の帯、水髪の毛巻島田で。――
あゝ、似た姿だ、お梨影きんに。

失禮だつたら御免なさい。煙の中に幽霊か――
それとも、自分の目ばかりは、何の御婦人も、お
梨影きんに見えるのかと思つたんです。

すぐに、御親族の席で、導師の緋の法衣の袖に隠
れました。ちらりと横顔も見ましたが。

唯、見合せた顔を、二人は對の横顔に成つて靜に
行く。

「敵つて、爪先上りである。」

「少時して、」

「藤子さん。」

「然うしますと、其が貴女だつたんですな。」

「濟みません。」

「何うも 御挨拶で。」

「白無垢、白羽二重、水髪の毛巻島田 ー ー 先
生がおつしやるのを窺つて居ますと、何ですか、大
層、綺麗で、清らかで、様子が可いつたらありませ
ん。」

「勿論です、 ー ー 凄いくらゐ。」

「あゝ、凄いだけは、眞個かも知れませんか。」

「 ー 一寸、 馬車が通りますのね。」

「門前ですな 湯治客が大分歩きます。」

「大に世間らしく成りました。」

「ですが、恚うして岨について廻つて來ました處では、いまの怪訝なお堂は、却つて此處から近いやうでございますこと。」

「眞個です。しかし最う、あの變な奴等が喚いたつて恐れやしません。」

「然うしますと、あの、私も、もう徐々消えなくつては成りますまいねえ。」

「緋の法衣の陰で、白無垢で――何うぞ、願ひますから消えないで居て下さい。」

「せめて、こんなものでも。」

優しく見つゝ、

「ですか――先生。」

御

鼻負の姉のかはりに。」

「弱りました。」

と俯向きながら、

「いまの化ものには――貴女もまた、何うしてあんな處へ行らしたんです。」

――聞くと、藤子も矢張り、湯の神とある石碑にひかれて、やがて毘首羯摩作の牡丹の額に誘はれ

て入つたのださうである。で、例の書畫、器ぶつ、骨董の陳列架を、何の氣もなく一巡すると、何となく、も一つ奥に、本尊の其の薬師の尊像がありさうな氣がした。時に、藤子の折には、襖は閉めてはなかつたと言ふ。うっかり入ると、入ると否や、頭巾着た坊主が毛氈を前にして、漆の兀げた置物のやうに坐つて居た。が、其の金壺眼がぎよろりと光つて、此方の風態を見たと思ふと、いきなり、へた／＼と筋を抜いたやうに叩頭をした。形勢、藤子の方でも其處へ膝をついて挨拶しなければならなかつた。

まだ一言も交へないうちに、納戸の方から、のろ／＼と、然も摺足で出て來たのは、件の尼で。

藤子が何を思ふ隙もなく、すり抜けに、ヒタと背後を通つて、ぐいと襖を閉めた。――其の時の、藤子の様子は聞いて居ても思ひ遣られる。――閉めると、座につくと一所に、同じく叩頭をしたと思ふと、ニヤ／＼としながら、だんまりのまゝ茶を入れて、右のてんもく茶碗で、目を瞑つて何の禁厭だか、一寸自分の手で頂いてから、疊を摺らして眞直

に押据ゑて、――其處で短冊色紙であつた。

言ふまでもなく斷ると、斷るのを押返してもすれば、まだしも言種はあるのに、一度斷ると忽ち二人が川底の魚の如く頭を揃へて、無言で突伏した、状は、三吉が視た――あの通りだと言ふのである。

藤子は言ひ足して、

「呼吸が詰るやうでしたわ、陰氣で、

重くるしくつて、薄氣味が悪くつて――棟列架の處へ誰方がおいでなすつた様子は分りましたけれど、まだ其の上へ、變なものゝ親分だか、大將だか知れないでせう。見物の方にした處で、そんな場合ですもの、助けて下さいとも、来て下さいとも何も、申しやうはありませんし――大袈裟のやうですけれど、眞個に何うしようかと思ひました。

お蔭様で助かつたんです！ 梨影さんの引合せと思ひます。――

それから、髪の毛に墨をつければ、刈萱の葉ぐら

みには見えませうし、名の一字だけでもとあゝ言ひますものを、心あつて惜みでもするやうに、生意氣らしくも、意固地らしくも、お思ひなすつたでせうけれど
先生。

第一、それが可厭だつたら、いくらか餘分にお賽錢を包めば、事が濟むらしい様子でした。けれど、其さへ、口惜しくつて出来なかつた、――別に譯があるんです。

私が、あの額を視て入ります時、玄關わきの羽目へ、悄然と立つて居た、小兒を負つた、銀杏返に結つた、三十ばかりの竄れたお上さんが一人居たんです。土地の人らしいんです。

手に御みくじを持つて、凝と視て、私が傍を通りますの知らないで居るやうでした。

凶が出たんだ。――然うらしい、御亭主が煩ひでもして居るのか知ら、お可哀相に、と然う思ひましてね、ぼんやり陳列架を廻つても、氣に成りま

すから、密と視ますとね、まだ立つたまゝで居て、
そして其の時には、しく／＼泣いて居なざるぢやあ
りませんか。お薬師様のおみくじでせう。

住持の和尚さんでも居なすつたら、――何う
して上げようつて方角はありませんまでも、それと
なく、其の方の様子が聞きたいと思ひましたのに

――御存じの、あれなんですもの。

先生はお氣が着きませんでしたか。あの二人の突
ふして居た背後の棚に、怪しいびか／＼の切を敷い
た上に、大なる木魚を二嵩積んだやうな、圓くつて長
みのある、御くじとかいた朱塗の箱がありました。

柄を視れば一目で知れます。

むかし、あの謙信に睨殺されたつて言ひます、飯
繩つかひの行者が、狐を憑けては、其の狐を法力で
落しては、祈祷料を貪つたと同じに、みくじは大吉
でも、判断で凶に返して、弱い人を泣かせた上で、
が、しかし、御祈祷の功德に因つて

就て

は、とか言つてお供物の金子をふんだくるのに違ひ
ない。

端つから、然う思つたもんですから、勘當された
女でも、親にもらつた名どころですか、お賽銭の些
とだつて、私、口惜くつて／＼

三

「。惜くつて、口惜くつて。」

「ら、ら、ら。」

「よ。」

「ら、ら、ら。」

「シエーネーション。」

口々に哄と囃した、門前町をぞろ／＼と歩行く、皆制服で少年の學生である。多人數であつた。町通りの何とか言ふ旅館の二階に、同じ學生が、殆ど黒く成つて一杯で、表廊下に溢れかゝつて、其の多くは、欄干に馬乗に跨つて居た。其處からも、ワツ／＼と聲を合せて喚いた。

二人は黙つて通抜けた。

「畜生　　ー　　」

と送り聲が耳に響く。　　ー　　此の間に名所なん

ぞがあつたかも知れない。

「畜生だつて　　御免なさい、此方はお化

だ。」

と藤子は微笑んで低聲で言つた。

「大したものですな　　ー　　しかし風儀は悪く成りましたぜ。　　以前には、學生でさへあれば、安心をしたものです。寂しい、人通りのない處でも出會して御覽なさい。それが學生だと、中でも制服のなんぞは、どんなに頼母しかつたものだから知

れません。」

「え、私だつて、あの大勢の人たちが學生さんでなければ、歩行しながらお饒舌りなんかするのぢやありませんでした。他の人たちと違つて、何ですか、心易い、内輪の方のやうに思つたものですから

」

「然も中學校です、皆若い。しかし東京ではありませんまい。とに角大した事に成りましたよー。尤も、貴方のやうな御様子の住いのと、憚らず連立つて歩行くんです、此方も大したものです。」

あゝ、失禮。」

と三吉は衝と五六歩あとを追つた。

奥に寺があつて、山のもみぢの裾を、美しい鹿のやうに、藤子がすつとそれて行つたのであつた。

三吉は笑ひがら、

「私は、そんな意味で言つたのぢやあゝ

りません。」

「いゝえ。」

と藤子は眞顔でうけて、

「唯今のが、光雲寺ですわ。札が建つて居りました。」

「成程。」

と見返ると、境内から、町通りへ、颯と走つて、
小な灌のやうに潔い水が落ちる。

ざつと鳴る冷い音の、別に路傍に水道の栓があつて、
婆さんが菜を洗つて居た。

然うかと思ふと、もんぺ穿いた若い女が、荷擔で
二手桶、肩にして此は小流を汲んで、田畦へ行抜け
の廂合を入つて行く。

「先生も御見物をなさいませうし、私もお參詣を
するつもりで居ましたんですが、彼處で、可厭なも
のを見たものですから
あの、段々を、山
門に入つて行きます。」

「また、尼ですか。」と浮り言つた。

「もう、些と毛の生えた　ー　ほゝゝ、矢張私
たちの秋絃館に居ます、客ですがね、其は後
態ばかりで顔は見なかつたんですけれども、番頭が
ついて居ましたから。」

「あゝ、大變な代ものだ　ー　すると、其の客
と言ふのは來權とか言ふんですな。」

「御存じ？」
「と言ひかけて、

「あゝ、然う／＼　ー　先生に女の足を

まあ、止ませうね　□

で、言つても勿體ない。ですけど、貴方、然う申せ
ば　先生の御心づくし、（沁々嬉しうご
ざいます、死んでなんぞ居られやしません。）　ツ
て梨影さんが然う申します。

あの、優しい顔で、莞爾するのが、目に見えるや
うですよ。化けて出ますよー。

柳がある。一寸、まあ、可恐い　「と

鹿はまた、ひらりと行つた。が、やがて其處七絃

瀧に面する蓬萊橋に近い處に、名所の繪端書、名ぶつ木の葉石などを鬻ぐ店を斜に構へた前で停つて、待つて、振返つても、まだ其の枯柳の寂しい日向に――蝶は居ないが、――恰も其處が豆腐屋の前に、三吉がイんだまゝで居るのを視ると――胸を抱いて、身輕に、つゝと引返して來て、

「先生、何うなさいましたの。」
「此は故々お立戻りで。」と行迎て又並ぶ。

「まあ、可厭な お腹がおすきなつて？
、甘酒がめし上りたかつたんですか。」

柳の下に荷があつて、髯の白い老人が屈んで居た。

「甘酒ぢやあゝりません。――私は珍しいものを視ました。あれは油賣。」

「あぶら賣」

「油屋さんです。」
「あゝ、道理で膝に掛けて居ます。」

「話のやうだ。」 二人は一所に微笑んだ。

「感心に、清潔な豆腐だ。水槽が大きい、眞白です。

其處へ紅色のもみぢが、ちら／＼と浮いた處は、注文通りに出來て居ます。」

「緋の法衣の袖へ、白を着て入つた處でせう。――

豆腐に目鼻

と頬に袖して、

「似合ひましたわね。でも、お氣の毒でした事

――先生は、私の言つたのでお思ひ出しなすつ

て、あの柳の、姉さんの幽霊が御覽なさりたかつた
んでございませうのに。」

「待つて下さい。」

「それなのに、餘計な、豆腐だの、油屋だの、私だの。」

「ま、ま、待つて下さい。」 と其處で、一歩停

つたくらゐで、

「やぼに眞面目な事なんです。――」

近頃は山の手の方へは廻らなく成りましたか、それとも所帯持が悪く所爲ですか、久しい間、薩張り油屋を見掛けません。――鹽原へ来て、しばらく振で實際珍しいものを視ました。

然も貴方が、お梨影さんの幽霊がなぞとお言ひなさるから、尚可懐い氣がします。

油屋の髯も白い。

お話をすると、もつと、何うにかした、晝工に成つて居なけりや成らないのです。――私わたしが小兒こどもの時分、築地邊に居ました頃、晝工晝かきに成らうと思ひましたのは、油屋あぶらやに導みちびかれたと言つても可いんです。すきだから、出窓でまどの下したで、「目に毒どくだよ、」と言はれても、薄暗うすくらく成るまで試やつて居ませう。人形にんぎやうの顔かほだの、緋緘ひをどしの鎧よろひだの。

油屋あぶらやは、靈岸島れいがんじまから廻まはつて來きます、もと與力よりきだつたとか言いふお爺ぢいさんで、（齋藤道三さいとうどうさん罷出まかりいでしました）

なんのつて鹿爪らしい串戯を言ふのが、馴染だから、壺を持ちながら、出窓に立つて覗いて居て、（坊ちゃんうまい、）と譽めましてね、芝居の繪、錦繪は固より、張交の引つpegし、裂けたり破れたりぢやありませんが、種々なのを持つて来てくれるんです。すぐに手本に成りませう。

露地、いゝ女の妾が居ました。黒板塀で、其處に柳があるんです。――塀を覗いて、夾竹桃が咲くんです。初夏の晩方に、蝙蝠の棹を持つて、出ようとして、其の黒塀を見ますとね、葉越に宵月がさして居ます。何うした枝の加減だが、影の映るのが、女の髪で、結んだ島田に見えました。來竹桃の紅なのが、葉にこぼれて、薄色の鹿の子に見えます、と思ふと柳の葉にすつと傳ふ月の光が、そのまゝ女の顔に成ります。

私は飛んで歸つて、胡粉を持って出て、などつた、塗つた。――黒塀がぼつりと、目、鼻、眉、瞳に成るまで。

柳を其のまゝ鹿の子切の結綿に見惚れて居ると、
奥の長屋で油を賣つた爺さんが、のそ／＼と出て來ましたつけ。ものを言はずに腕組をして凝と視めて居ましたが、一掬、油を汲出して、柳の髪に、とろりと掛けると、つら／＼と眞黒に成つて光つたんです。「油を掛けるとは此の事ぢや偉い。」と言つて、しつかりと抱いたんです。

小兒の目にも、最う、其のお妾なぞは驚きません。

尤も、此が抜けて出ると又兵衛なんですが、お妾に拭消されたんだからだらしはない。

が、消されたあとでも、いつまでも見とれるやうな其の繪の面影が残りしました。

はじめて、お梨影さんを見ますまで。
「あゝゝ、幽霊が見えますよ。」

空も水も眞蒼に、雲と瀬は銀を散した。

「お梨^り影^えさん、姉^{ねえ}さんの。」

【完】